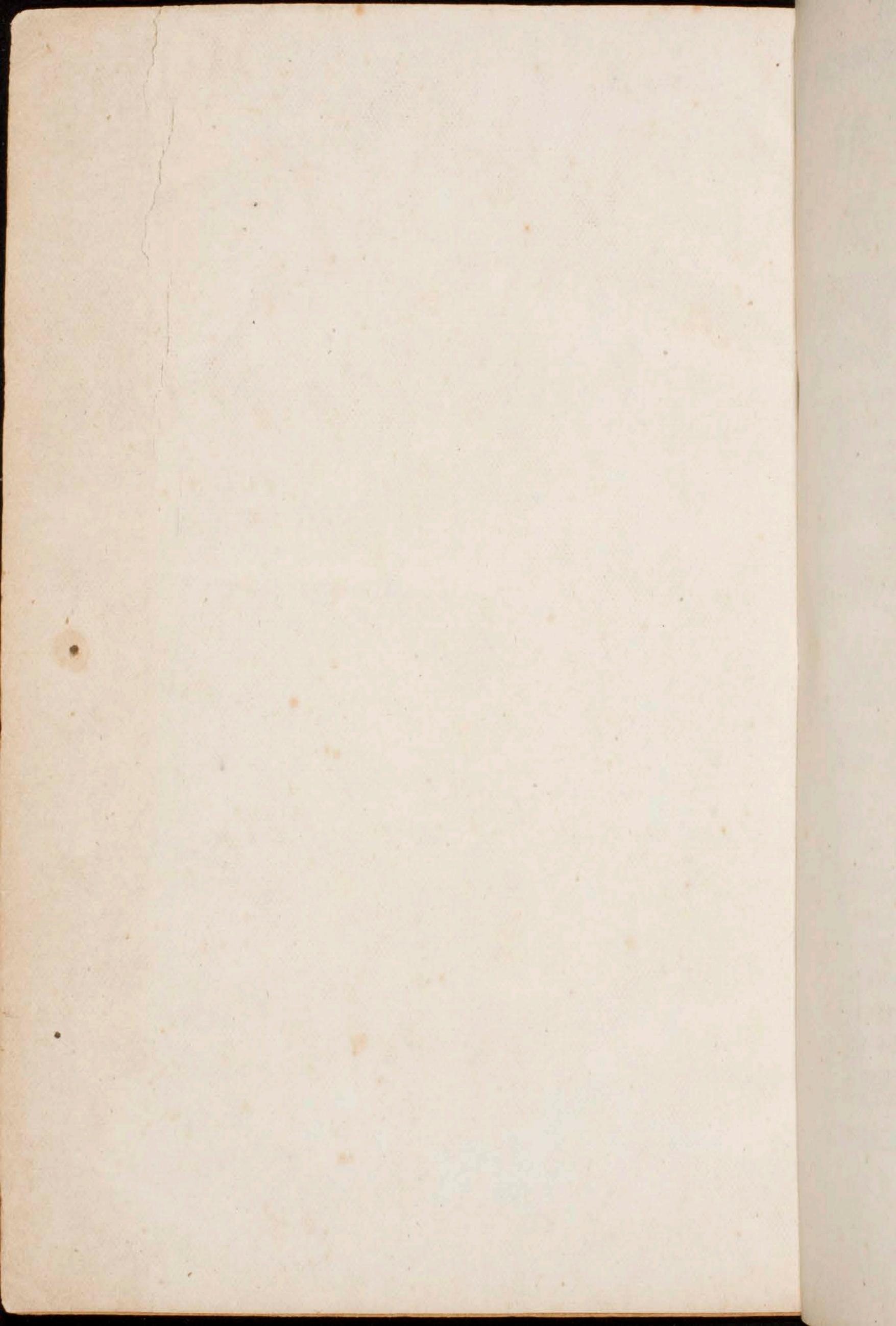


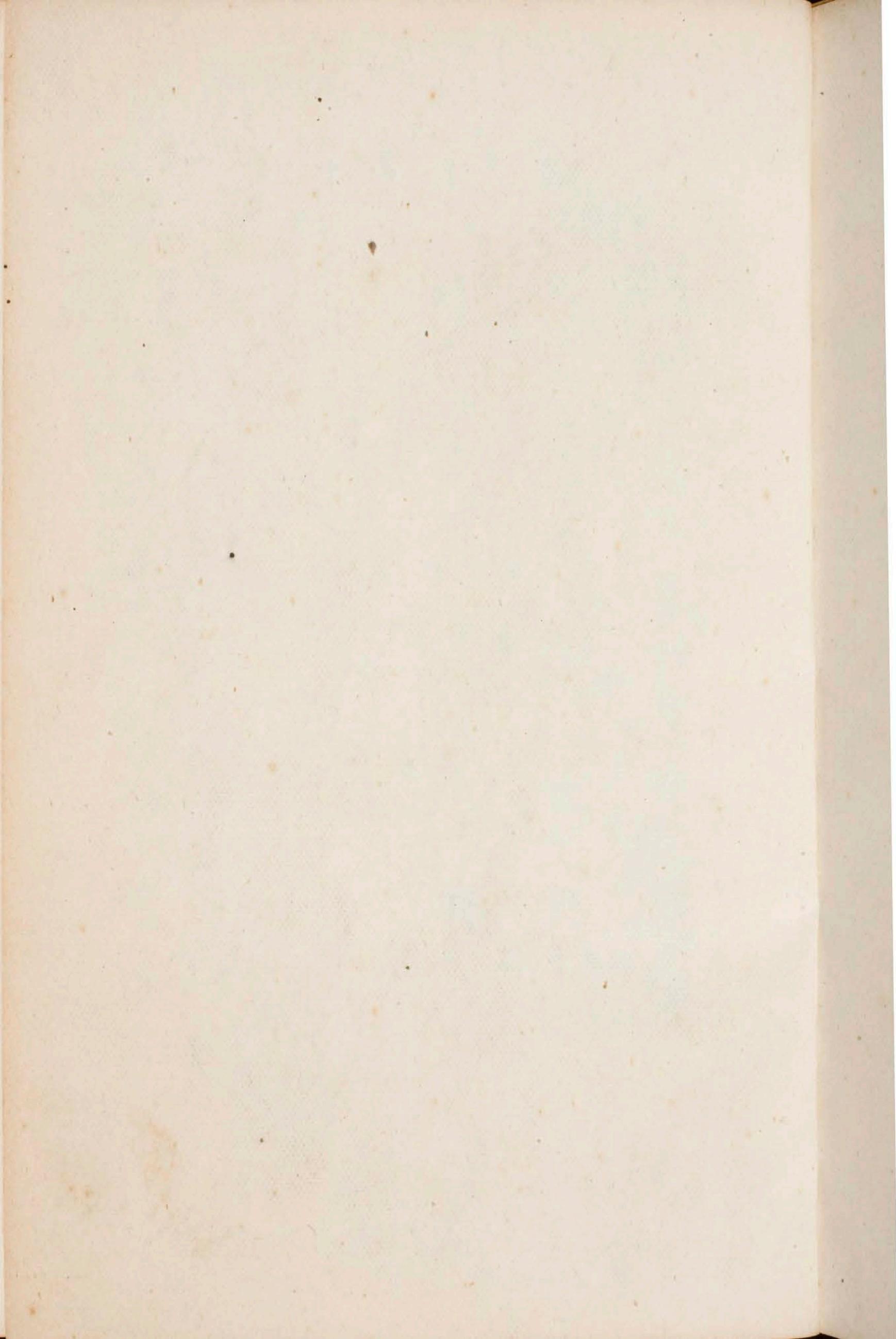
明治三十年十二月出版

福澤全集總言

全

時事新報社發兌







此の裏面をも見よ

福澤先生全集

豫約出版

全部五冊總紙數凡四千五百頁
菊版洋裝表紙總クロース金字入

本集は福澤先生が今を去る卅八年前即ち萬延元年より明治廿六年に至るまで
の間に親しく著譯したる許多の書類を蒐集刊行するものにして集中收むる所部數五十、冊數百七、從前發行の數を算すれば多寡平均して三百五十萬部、七百四十九萬冊に達し實に
著譯と云ふ可し是れ皆開國變遷の際に在りて先生が西文移植の實効を遂げたるものなれば之なり之を大にしては新日本文明の活歴史なり本社は購讀者の便利を圖り裏面に記せる豫約方法に依りて廣く世人の需めに應せんとする

此の裏面をも見よ

此の表を見てもよ

福澤全集總目錄豫方法

三二
二二九八七六五四三
二〇

英清掌洋窮西條西雷同同華緒
國英中兵理洋銃事情通
議交萬衣十一旅操二編外編
事際國明圖食ケ案始一談未覽鑑解住記內法語言

二二二二二二二二二二二二二二
五四三二一〇九八七六五四三二

分學文會文第第帳改童學啓世
者明論之文字合大蒙問之ス、メ
權安論議之教字之附錄辨娘草
心概略之教法辨娘草盡

三三三三三三三三三三三三三三
九八七六五四三二一〇九八七六

學兵德帝時時民同通通福同民
事育室大小事情俗後國民貨文
問獨如大勢權權論何論論言新篇
立論論論論論編錄

四五四四四五四五三二一〇
九八七六五四三二一〇

實治國尊日勇士品同日通全
會本女人本俗國
業安の王男交處行後婦外微
小前子際世人交兵
論言途論論論論編論論

發行所電（編輯用本局一四九番）
話（事務用本局三二七番）
時事新報社出張所

東京京橋區南鍋町二丁目十二三番地
大阪北區堂島濱通一丁目四十番屋敷

二二
二二
本書第一卷は卅一年一月一日を以て發兌し爾後毎月一卷を發兌し同年五月を以て完了す
豫約送料本年十二月廿五日迄に一時入金のもの
但豫約申込別に申受くべし本書壹冊量目凡四百目小包郵便料十里迄七錢百里迄十二錢百里以外廿四錢
豫約申込期限は本年十二月十日迄とす
あるも本年十二月廿五日迄に豫約金御拂込なきときは無効とす

福澤全集緒言

福澤諭吉

四十年來余が著述又は翻譯したる諸書類を集めて新に版行せんとす
るに當り聊か其趣意を一言して卷首に記し置かんとす抑も余が著譯
書は其數甚だ尠なからずと雖も隨て作れば隨て散じ所見を天下に披
露したる後は所謂成行次第に任せて主人は曾て相知らず歲月の遷移
と共に其書物を算へて算へ難く主人自から忘却して失笑する場合も
なきに非ず今これを版行して散逸を防ぐは一は余自身の子孫の爲め
にして又知己朋友の爲めなり現に先頃版行の事を思立つと同時に隈
なく家内を搜索せしも何時しか藏書四散して其半を留めず餘儀なく
使を舊知人の許に馳せ或は借受け或は貰受けなをして漸く全部を取揃

へたる其手數は實に容易ならず今日斯る始末なれば行くゝ五年を過ぎ七年を過ぎ余の死後にも至らば捜索の勞は十倍して尙ほ搜し得ざる者あらん情に於て窃に惜む所なり一身の私情は暫く措て拡廣く世間を見渡すに今日の日本は昔日の日本に非ず所謂新日本と稱して舊來の舊觀を改め文明諸國と交際して敢て遜色なきに至りたれども新日本は一朝の誕生に非ず因果の理路を尋ね来れば近きは四十年遠きは四百年の其上にも越えて變遷沿革の端緒を見出すことある可し左は云へ兎に角に日本が舊物破壊新物輸入の大活劇を演じたるは即ち開國四十年のことにして其間の筋書と爲り臺帳と爲り全國民をして自由改進の舞臺に新様の舞を舞はしめたるもの多き中に就て余が著譯書も亦自から其一部分を占たりと云ふも敢て疚しからず余の放言して憚からざる所なり左れば其筋書臺帳を彼れ是れ寄集めて之を

参考に無益ならざる可し先づ第一に余が文筆概して平易にして読み
以上は舊觀新形の理由として骨筋事の序ト前年余が多くの書を翻訳したる其由來因縁を記憶のまゝに一節づゝ記し置くも自から世人の
参考に無益なれば其筋書臺帳を彼れ是れ寄集めて之を

後世に保存するは近世文明の淵源由來を知るに於て自から利益なき
に非ず歴史上の必要と言ふも過言に非ざる可し

以上は舊書新刊の理由として尙ほ事の序に前年余が多くの書を著譯
したる其由來因縁を記憶のまゝに一節づゝ記し置くも自から世人の
参考に無益ならざる可し先づ第一に余が文筆概して平易にして読み
易きは世間の評論既に之を許し筆者も亦自から信じて疑はざる所な
り今その由來を語らんに四十餘年前余は大阪の大學醫緒方洪庵先生
の門に在り先生の平生、溫厚篤實客に接するにも門生を率ゐるにも諄
々として應對倦まず誠に類ひ稀れなる高徳の君子なり然るに此先生
が一旦文事に臨むときは大膽とも磊落とも譬へ難き放膽家にして其
議論には毎度人を驚かすことあり當時上國にて蘭學の大家と云へば
先づ先生一人にして門生常に門に満ち著譯の書亦甚だ多し扱大阪を

措て江戸の方には蘭學を以て門戸を張るもの甚だ多くして其中最も有名なるは杉田成卿先生なり此人は眞實無垢の學者にして其蘭書を翻譯するには用意周到一字一句を苟くもせず原文の儘に翻譯するの流義なれば字句文章極めて高尚にして俗臭を脱し一寸手に執りて讀下したるのみにては容易に解す可らず熟讀幾回趣味津々として盡きざるの名文にして此先生の世に出したる譯書も亦尠なからず以上二先生は東西學問の兩大關にして名望學識共に相下らずおのゝ得意はありながら其翻譯の風に至ては徹頭徹尾正反對にして緒方先生は前にも云ふ如く一向字句に構はず荷蘭の文法を明にして其難文を解釋するは最も得意なれども翻譯の一殷に至れば原書を輕蔑して眼中に置かず其持論に曰く抑も翻譯は原書を読み得ぬ人の爲めにする業なり然るに譯書中無用の難文字を臚列して一讀再讀尙ほ意味を解す

云ふ者が遠方にて何か翻譯したりとて先生の許に草稿を送りて校閲
持論の事實に現はれたる一例を言はんに或時門生の一人坪井信良と
可きの甚だしきものなり云々とは吾々門下生の氣に聞く所にしむ其

るに難きものあり畢竟原書に拘泥して無理に漢文字を用ひんとする
の罪にして其極譯書と原書と對照せざれば解す可らざるに至る笑ふ
可きの甚だしきものなり云々とは吾々門下生の毎に聞く所にして其の
持論の事實に現はれたる一例を言はんに或時門生の一人坪井信良と
云ふ者が遠方にて何か翻譯したりとて先生の許に草稿を送りて校閲
を乞ひけるに先生は朱筆を把りて頻りに之を添刪しつゝあり其時余
は先生の傍らに居合せ親しく様子を窺ふに先生の机上には原書なく
して唯翻譯草稿を添刪するのみ原書を見ずして翻譯書に筆を下すは
蓋し先生一人ならん其文事に大膽なると概ね此の如し其頃余は塾に
居て蘭人ペル著の築城書を翻譯する折柄にてありしかば或日先生余
に告げて云はるゝやう今足下の翻譯する築城書は兵書なり兵書は武
家の用にして武家の爲めに譯するものなり就ては精々文字に注意し

て決して難解の文字を用ふる勿れ其次第は日本國中に武家多しと雖も大抵は無學不文の輩のみにして是れに難解の文字は禁物なり試に彼等を平均して見よ足下なれば年も少くして固より漢學の先生には非ざれども士族の中では先づ以て知字の學者と申して宜し左れば此知字の學者が洋書を譯するに難字難文を用ひんとすれば唯徒に讀者の迷惑たる可きのみ故に翻譯の文字は單に足下の知る丈けを限りとして苟も辭書類の詮議立無用たる可し玉篇又は雜字類編なども坐右に置く可らず難字難文を作り出すの恐れあればなり但し人間の記憶には自から限りありて易き文字も不圖忘るゝこと多し其時には俗間の節用字引にて事足る可し醫師の流には學者も多くして自から譯字の議論喧しきことなきに非ざれども足下は醫流に縁なし高の知れたる武家を相手にすることなれば返すべくも六かしき字を弄ぶ勿れ云之を改むるに客ならず儻へば築城書の一節に應有の様料云々と記し

々と警められたる先生の注意懇到父の子を訓るも啻ならず余は深く之を心に銘して爾來曾て忘れたることなし文を草するに當り思はず筆端に難文字の現はれんとする事あれば直に先生の警を思出して之を改むるに吝ならず例へば築城書の一節に「應有の材料云々」と記して心窃に平かならず早速有合の品云々と改めて始めて満足したるが如き毎度の事にして枚舉に遑あらず余が著譯の平易を以て終始するは誠に先生の賜にして今日に至る迄無窮の師恩を拜する者なり其後江戸に來りて種々の著譯を試るに至りても力て難解の文字を避て平易を主とする一事は曾て念頭を去らず同時に江戸の洋學社會を見るに著譯の書固より多くして何れも假名交りの文體なれども動もすれば漢語を用ひて行文の正雅なるを貴び之が爲めに著譯者は原書の文法を讀碎きて文意を解するは容易なれども穩當の譯字を得ると難

くして學者の苦みは専ら此邊に在るのみ其事情を丸出しに云へば漢學流行の世の中に洋書を譯し洋説を説くに文の俗なるは見苦しこと云はゞ漢學者に向て容を裝ふものゝ如し蓋し百年來の翻譯法なれども斯くては逆も今日の用を辨するに足らざるを信じ依て窃に工風したる次第は漢文の漢字の間に假名を挿み俗文中の候の字を取除くも共に著譯の文章を成す可しと雖も漢文を臺にして生じたる文章は假名こそ交りたれ矢張り漢文にして文意を解するに難し之に反して俗文俗語の中に候の文字なけれどて其根本俗なるが故に俗間に通用す可し但し俗文に足らざる所を補ふに漢文字を用ふるは非常の便利にして決して棄つ可きに非ず行文の都合次第に任せて遠慮なく漢語を利用し俗文中に漢語を挿み漢語に接するに俗語を以てして雅俗めちやくに混合せしめ恰も漢文社會の靈場を犯して其文法を紊亂し

唯早分りに分り易き文章を利用して通俗一般に廣く文明の新思想を得せしめんとの趣意にして乃ち此趣意に基き出版したるは西洋旅案内窮理圖解等の書にして當時余は人に語りて云く是等の書は教育なき百姓町人輩に分るのみならず山出の下女をして障子越に聞かしむるも其何の書たるを知る位にあらざれば余が本意に非ずとて文を草して漢學者などの校正を求めざるは勿論殊更らに文字に乏しき家の婦人子供等へ命じて必ず一度は草稿を讀ませ其分らぬと訴る處に必ず漢語の六かしきものあるを發見して之を改めたると多し然かのみならず余が心事既に漢文に無頓着なりと決定したる上は勉めて此主義を明にせんとを欲し例へば「之を知らざるに坐する」或は「此事を誤解したる罪なり」と云へば漢文の句調にて左まで難文にも非ざれども態と之を改めて「之を知らざるの不調法なり」又「此事を心得違したる不行

届なり」と記すが如き少年の時より漢文に慣れたる自身の習慣を改めて俗に従はんとするは隨分骨の折れたることなり又字義に就ても同様にして例へば恐の字と懼の字と漢文には必ず其區別を明にすればも和訓には二字共にオソルと讀むゆゑ先づ世間普通の例に倣ふて恐の字ばかりを用ひたり此外余が著譯書中には漢文流の字義を誤りたるもの甚だ多し實は自分にも其大概を知らざるに非ざれども兎に角に通俗に分りさへすれば夫れて宜しとして態と無顧着に附しそうり要は世間の洋學者を磊落放膽に導き漢學を蔑視せしめんとしたる臨機一時の方便なりと知る可し

又余が若年十七八歳の頃舊藩地豊前中津に居るとき家兄が朋友と何か文章の事を談する其談話中に和文の假名使ひは真宗蓮如上人の御文章に限る、是れは名文なり云々と頻りに稱賛するを余は傍より之を

試してゐるまでものことなりし我が其後數年を經て江戸に來り洋書翻譯を試るときに至りて前年の事を思出し右御妙章の合本一冊を買求め

文章に限る、是れは名文なり云々と頗りに稱賛するを余は傍より之を

聞て始めて蓮如上人の文章家たることを知りたれども其御文章とは如何なる書籍にや目に觸れたることもなく唯一時長者の文談を聞流しにしたるまでのことなりしが其後數年を経て江戸に來り洋書翻譯を試るときに至りて前年の事を思出し右御文章の合本一冊を買求めて之を見れば如何にも平易なる假名交りの文章にして甚だ讀易し是れは面白として幾度も通覽熟讀して一時は暗記したるものもあり之が爲めに佛法の信心發起は疑はしけれども多少にても假名文章の風を學び得たるは蓮如上人の功德なる可し

又高谷龍洲先生は元と舊中津藩士にして余が母の再從兄弟なれば自から親戚の交際もあり且つ先生は豊後帆足萬里先生の門に在て余が父にも交り漢學に於ては深く經義に通じて文章に名ある人物なり維新後東京に住居せられ或時余が家に來訪談話は例の如く文談にして

先生の云はるゝに足下は幼にして薄命、何も知らぬ事なれども在昔尊
 厳福澤百助先生が豊前中津藩の文壇を専らにして敢て争ふ者なかり
 しは拙者の親しく見る所なり此父にして此子あり今日足下の著譯書
 を見るに文章甚だ妙なり唯遺憾なるは足下が漢文を知らずして假名
 交りの俗文に偏するの一事のみ左れば足下も今より志を立てゝ正文
 を學ぶの意なきや若しも其意あらんには他人を煩はずに及ばず拙者
 自から之を教授す可し足下の才を以て勉強すれば僅に半年を費し忽
 ち日本一の文章家と爲りて第二の福澤百助先生を生ずるは拙者の確
 に保證する所なり云々とは流石親戚の間柄なり又亡父の親友なり少
 しも挾む所のものなく親切一偏の勸告なれば余に於ては其至情に對
 して返す言葉もなき次第なれども左ればとて今更ら自から漢學漢文
 の先生たるを好まざるのみか寧ろ之を排斥せんとて勉強する最中な

て先づ一禮を述べ先生の御忠告誠に過承至極難有出合なれども自
 本邦の通り三歳にして父喪ひ教育の世話をいたす者なければ漢
 文學漢文

の先生たるを好まさるのみか寧ろ之を排斥せんとて勉強する最中な

れば先生には氣の毒千萬ながら固より之に從ふの意なく乃ち頓首して先づ一禮を述べ先生の御忠告誠に過分至極難有仕合なれども自分は御存じの通り三歳にして父を喪ひ教育の世話をいたす者なければ漢學とて何等の所得もなく弱冠にして洋學を學び今は著譯などするも其文章は唯通俗一偏のみ亡父に對しては耻かしき次第なれども自分の筆は既に世俗流の習慣を成したるゆゑ今更ら之を改むる譯けにも参らず云々と體よく謝して分れたるとあり夫れより獨り自から接するに龍洲先生が亡父以來の舊縁故を以て斯くまで深切に忠告せられたることなれば他にも亦必ず同感の人ある可きなれども自分の文章は最初より世俗と決心し世俗通用の俗文を以て世俗を文明に導くこと恰も眞宗の開祖親鸞上人が自から肉食して肉食の男女を教化したるの顰に微ひ何處までも世俗平易の文章法を押通し世俗と共に文明

の佳境に達せんとするの本願にして曾て初一念を變じたるなき今日、到底先生の忠告には従ふ可らずと覺悟して其忠告と同時に却てますく俗文主義の志を固くしたるこそ是非なき次第なれ又これに就て一些事を記さんに余が印章に三十一谷人の五字を刻したるものあり是れは谷にも山にも地名などに縁あるに非ず三十一を一字にすれば世の字にして谷人の人を扁にして左右に並ぶれば俗の字と爲るが故に即ち世俗の意を寓したるものにして前年龍洲先生の文談を聞きし後に特に彫刻せしめたる戯作思付の印なり

又王政維新後、明治の初年大阪に醫學校やうのものを官設し余が舊友中この學校に奉職して醫書を翻譯する者あり或時余は大阪に遊び其學校を一見せしに在校の一友今その人を記憶せず坪井芳洲かと覺ゆ余を迎て共に語り種々の原書なぞ見る中に友人が書中の一原字を指

出逢ふたときには何とするやとの相談に余は大に笑ひ君は今讀語に困ると口に言ひながら其口は既に適當なる語を吐て原字を譯出した

學校を一見せしに在校の一友今その人を記憶せず(坪井芳洲かと覺ゆ)
余を迎へて共に語り種々の原書などを見る中に友人が書中の「原字」と指

點し時に此字を何と譯して穩ならん、あてはめると云ふ字であるが抑
譯語には困る、君は是れまで毎度譯したることもあらんが、こんな字に
出逢ふたときには何とするやとの相談に余は大に笑ひ君は今譯語に
困ると口に言ひながら其口は既に適當なる語を吐て原字を譯出した
るに非ずや、君の言はるゝ如く、あてはめるとは誠に穩なる日本語にし
て申分なき譯字なり僕なれば直に此日本語を以て原字を譯する積り
なり全體君等が西洋の原書を翻譯するに四角張つた文字ばかり用ふ
るは何の爲めなるや詰る所は漢學流の機嫌を取る積りならんなれど
も今の文明世界に漢字を詮索するが如き閑日月はある可らず御同前
に眼中漢學者なしと度胸を定めて唯新知識の傳播を勉むべきのみ云
々とて朋友の間柄、他に憚る所もなく互に思ふ所を談話したことあ
り當時は洋學社會の人数甚多からず其互に懇親なるは一種の秘密結

社に等しく他人に言ふ可らざる事柄ことがはらにても互に打明けて語るの常にして是れは今人の知らざる所なり

翻譯文の事は凡そ右の方針にして先づ便利を得たれども之に次で困却したるは追ひく西洋の新事物を輸入するに隨て之を代表する新文字の絶えて無きことは是れなり初めの中は漢書かんしょを彼れ是れと亂抽して相當の文字もがなと詮索せんさくしたれども到底其甲斐なきも道理なり元來文字は觀念の符號ふがうに過ぎざれば觀念の形なき所に影の文字を求むるは恰も雪ゆきを知らざる印度人いんぞくじんに雪の詩を作らしむるが如く到底無用の沙汰さたなれば遂に自から古いだしへを爲し新日本しんにほんの新文字しんもじを製造せいぞうしたる其數亦尠さながらず例へば英語のスチームを從來蒸氣じょうきと譯やくするの例なりしかゞも何か一文字に縮めることは叶ふまじきやと思付き是れと目的はなけれども藏書の康熙字典かうきょうじてんを持出して唯無暗に火扇水扇ひせんみすいせんなどの部

白しと獨り首肯して始めて海の字を風ひたり假し西洋事情の口傳にて
蒸氣濟人云々と記したるは對句の爲め蒸の一字を加へたることなり

を搜索する中に汽と云ふ字を見て其註に水の氣なりとあり是れは面白しと獨り首肯して始めて汽の字を用ひたり但し西洋事情の口繪に蒸氣濟人云々と記したるは對句の爲め蒸の一宇を加へたることなり今日と爲りては世の中に滌車と云ひ滌船問屋と云ひ誠に普通の言葉なれども其本を尋ねれば三十二年前余が盲搜しに搜し當てたるものと即席の頓智に任せて漫に版本に上せたるこそ滌の字の發端なれ又當時コピライトの意義を含みたる文字もなし官許と云へば稍や似寄りたれども其實は政府の忌諱に觸れずとの意を示すのみにして江戸の慣例に據れば臭草紙の類は町年寄の權限内にて取捌き其以上學者の著述は聖堂又翻譯書なれば著書調所と稱する政府の洋學校にて許可するの法にして著書發行の名譽權利は著者の專有に歸すと云ふが如き私有權の意味を知る者なし依て余は其コピライトの横文字を直

譯して版權の新文字を製造したり其他吾々友人間にて作りたる新字
も甚だ少なからず名は忘れたり或る學友が横文にあるドルラルの記
號\$を見て豎に似寄りの弗の字を用ひドルラルと讀ませたるが如き
面白き思付にして之に反し余がポストヲヒスを飛脚場、ポステージ
を飛脚印と譯して郵便の郵の字に心付かずブックキー・ピングを帳合と
譯して簿記の字を用ひざりしは餘り俗に過ぎたる故か今日世に行は
るゝを見す

又文久年間のこと、覺ふ唐人往來とて余が記したる一小冊子あり出
版はせざりしなれども今その草稿の遺るものを取り出し見れば誠に小
児の話にて唯可笑しけれども亦以て三十何年前の事情を想ひ見る可
く又當時余が之を記したる由來に付き一奇談こそあれば併せて之を
語らんに其頃は所謂攘夷論の最中にして浮浪の徒と稱する輩が諸方

申なりし折しも余が學友神田孝平氏は江戸に住居して獨身の書生な
れば年とりたる婆を雇ふて賄をさせ居たりしに此婆が律義一偏塾氣

に亂暴を逞うし外國人を暗殺する者あり洋學者を脅迫要擊する者あり御殿山の公使館を焼き市中の唐物店に亂入する等實に物凄き世の中なりし折しも余が學友神田孝平氏は江戸に住居して獨身の書生なれば年とりたる婆を雇ふて賄をさせ居たりしに此婆が律義一偏堅氣の正直者たるに拘はらず生來の唐人嫌にて當時外國人のことを通俗一般に唐人と云ふ朝夕何事に付けても外國人を憎むこと甚だしく小買物して魚類の價が高し野菜が高し米が高し酒が高し豆腐の代が同じことゝ思へば形を小さくしたり蕎麥の蒸籠も小形になれば鰻の丼も正味甚だ輕少なり其くせ紙屑を賣れば屑やは見倒し灰を賣れば灰も其れも唐人の所爲なりとて喋々しやべり續けに喧しけれども主人公の神田は少しも叱らずして却て面白きことに思ひよし／＼乃公の

辯舌方便を以て此婆を説諭し吳れん是式の老婆を説き伏せる位の伎
 倆なくて逆も天下に開國論を唱ふることは叶はず婆の頑固なるこそ
 幸なれ先づ之を試みんとて夫れより主人は殊更らに婆を手なづけ開
 暇の時には種々様々の話を始め直接に遠廻はしに開鎖の利害を説き
 或は笑ひ或は洒落或は立服の真似し或は心配の體を装ふなど丁寧反
 覆氣長にするほど三箇月も半年も試みたれども婆の剛情は鐵石の如
 く何としても解く可らず神田も近來は根氣に負けて聊か閉口の様子
 なりと或日のことなり箕作秋萍氏に面會し共に此事を語りて笑ひ且
 つは神田の苦心を推察し共に時運の非なるを歎息して相分れたる其
 跡にて余も亦一策を按じ神田が能辯を振て婆を口説くと云へば自分
 は筆を以て之を試みん一本の筆を振り廻はして江戸中の爺婆を開國
 に口説き落さんには愉快なりと夫れより勿々執筆書き綴りたるは即

の如し今憶舊の爲めに其全文を左に記す

に口説き落さんには愉快なりと夫れより第執筆書き綴りたるは即ち唐人往來なり之を寫して色々の人に與へたる數も隨分多かりしなれども果して功能ありしやなかりしや固より分らず往時恍として夢の如し今懷舊の爲めに其全文を左に記す

唐人往來

江戸 鐵砲洲某稿

一先年亞米利加合衆國よりペルリと云へる船大將を江戸へ差遣し日本は昔より外國と附合なき國なれども斯く國を鎖して世間と交らざるは天理人情に戻ることなれば古來の法を替へ外國と親しく交を結びて互に國の難澁を救ひ漂流人なぞある節は何れの國にても厚く之を取扱ふ様致し度く且つ平生國産の品をも双方町人同士互に交易賣買するを許し度き趣を公議へ申出引續き英吉利、佛蘭西等の國々よりも追々使節渡來して條約を取結び且つ又右の如く兩國の間柄親しくなる上は色々掛合事もあるに付き其取扱を爲すため彼國々より留守

居(外國の言葉にてはミニストルと云)一人づゝを江戸へ勤番致させ又双方賣買の取締として横濱長崎箱館等へコンシユルと云へる役人。壹人づゝ、勤番に差置くやう取極たり然る處日本國中の學者達は勿論餘り物知りでもなき人までも何か外國人は日本國を取りにでも來たやうに鎖國の攘夷の異國船は日本海へ寄附けぬ、唐人へは日本の地を踏ませぬなど仰山に唱へ觸らし間には外國人を暗打にする者などを出來て今やうに人氣の騒立つは唯内の騒動ばかりでない斯く人心の片意地なるは世間へ對して不外聞至極ならずや元來何の惡意もなくて一筋に異人を嫌ひ異人が來ては日本の爲めにならぬと思込みたる輩は自分には知らぬ事ながら我生國の耻辱を世間一般に吹聴する同様にして氣の毒千萬なれば此人々の爲め聊か辯解することある可し大凡世界の廣さ一里坪にして八百四十萬坪程あり此廣き地面を五に分ちこ

界の廣さ一里坪にして八百四十萬坪程あり此廣き地面を五に分ちこれ
を五大洲と云ふ亞細亞洲、歐羅巴洲、亞米利加洲、亞弗利加洲、澳太利
洲なり右五大洲の中、亞弗利加、澳太利は下國にして洲の内に國と云
ふ國もなく住人も生れ付知慧少なくして餘り學問も出來ず衣服其
外諸道具を巧者に作る事をも知らず先づ日本にて云へば蝦夷位の
ものなり亞米利加洲も北亞米利加の合衆國は別段開けたる國にて
世界中第一番の上國とも云ふべき程なれども其外は格別目ぼしき
國もなし唯一洲の内不殘繁昌して學問も武術も格別に世話行届き砲
術調練の盛なるは勿論其外蒸氣船蒸氣車等便利よき道具を造り人手
を費さずして師の備も爲し平日の用も達し安樂にして國の強きは歐
羅巴洲に限るなり亞細亞洲も隨分よき大洲にて人の數も多く產物も
澤山あり小細工物などは世界中に名を賣りたる程巧者に作り出し學
問も出精し中々亞非利加、澳太利の比類にはあらざれども兎角改革の

下手なる國にて千年も二千年も古の人の云ひたることを一生懸命に守りて少しあり臨機應變を知らずむやみに己惚の強き風なり其證據には唐土宋の時代より北方にある契丹、或は金なぞ云ふ國を夷狄々々と唱へそのくせ夷狄と師をすればいつも負けながら蔭では矢張り畜生同様に見下し己が方には何の改革も爲さず備もせず己惚許り增長して遂には其夷狄へ國も奪取れたり其後度々代も替りて明朝に至り其頃今の清朝は矢張り北國の韃靼に居たるものなれば明朝にては先々代の如く之を韃夷など、散々輕蔑したるに又其韃夷に國を取られ即ち今の清朝は昔の韃夷なり然る處清朝になりては自國の近傍に夷狄と云ふべき國もなく先年中己が夷狄と云はれたることを今は早忘却して今度は掛隔てたる西洋諸國の事を指して夷狄夷匪などを唱へ犬猫を取扱ふ様に心得我儘ばかり働きし處道光年中阿片始末の節、英吉利を

より痛き目に逢ひ償金を出して漸く中なをりしたり其後こそ心付
き國內の政事兵備を改革し外國との附合にも信實を盡くして不都合
なき様すべき筈なるに又々性も懲もなく四五年前天津と云ふ處にて
英吉利の軍艦と取合を始め不都合の始末にて遂に英吉利佛蘭西申合
せ大兵を指向けて北京へ攻入り咸豐帝は韃靼へ出奔し餓死同様見苦
しく落命したり是れ皆世間知らずにて己が國を上もなく貴き物の様
に心得て更らに他國の風に見習ひ改革することを知らざる己惚の病
より起りたる禍なり言語道斷、風上にも置かれぬ惡風俗、苟めにも其眞
似をすべからず兎角亞細亞洲には此風俗あるゆゑ能々謹むべきこと
なり傭右五大洲八百四十萬坪の地に在る人員凡十億許りなり其十億
の中或は五百萬人或は千萬人或は五千萬人宛仲間を結びて一所に住
居する土地を一國と云ふ即ち亞細亞洲にては日本、唐士、暹羅、安南、天竺

ベルシヤ國等歐羅巴洲にては英吉利、佛蘭西、荷蘭、魯西亞、摩爾、生、葡萄、伊太利等亞米利加洲にては合衆國、メキシコ等大國もあり小國もあり帝國の位もあり王國の位もあり輪番持の政事もありて何れも互に條約を結で親しく交り歐羅巴亞米利加などにて各國附合の様子は日本國中にて諸大名の國々相互に親しく附合ひ使者の往来もあり主人は主人同士、家來は家來同士縁組も爲し百姓町人は國産の物を互に賣買する事あるが如し尤も世界中廣きことなれば飲食衣服住宅等は土地の寒暖又舊來の風習にて國々異なる事もある可けれども人情は古今萬國一様にて言葉の唱へこそ違へ仁義五常の教なき國はなし何れの國にても親に不孝國に不忠にて構はぬと云ふ政事もなきものにして人を殺せば死罪に行はれ人の物を盗めば夫々の刑法もあり才德あれば人に貴ばれ愚昧なれば人に賤まるゝ等何も珍らしからぬことに

れば人に貴ばれ、愚昧なれば人に賤まるゝ等何も珍らしからぬこと

て一々並べ立つるにも及ばず然るに今日本一國に限り自から神國な
ど、唱へ世間の交を嫌ひ獨り鎖籠りて外國人を追拂はんとするは如
何にも不都合ならずや固より我日本を大切に思ひ之を尊敬し、惡しき
事をも成丈け包み隠して人に知れぬやう致し度きは人情の當然古人
の教に國惡を諱むと云ふ事もあれば隨分國を尊大に構へ他國を見下
す程の威力を張り度き事なれども謂れもなく自國許りを別段貴きも
の、様に思込み世間の事に頓着せずして我意を言募らば遂には人の
嘲弄を受け唐土同様の始末に陥り我國を貴ぶ心より實は却て我國を
賤むるの場合に成行べきやと深く心配する處なり前にも云へる如く
世界中の人數を十億人とし其内日本人の數凡三千萬程あり故に世界
中の人数と比例すれば九十七人と三人との割合なり。今何れの國に
もせよ百人の人あり其内九十七人は陸しく附合ひ往來する處へ三人

は天から降りたる者のやう氣高く構へ別に仲間を結んで三人の外は一切交を絶ち分らぬ理屈を言ひながら自分達の風に合はぬとて九十七人の者を畜生同様に取扱はんとせば夫れにて濟むべきや先づ世の中の笑はれものなるべし又譬へば日本にて諸大名の内風違の家ありて自分の家は古來の家格にて世間の附合をなさず諸家と縁組なきは勿論領分の百姓町人も他國のものと商賣するを許さず自國は自國の產物を以て用を達し決して他國の產物を領内へ入る可らず若し他國より附合を始めんと所望して使者を差遣し又は町人共より商賣に來ることあらば之を追拂ひ領分の土地へは一步も近付くべからずなど分らぬ我意を云ひ張らば第一其大名の家にても萬事差支へて不自由は勿論其上日本國中の評判に之を何と云ふべきや必ず其儘には差置くまじ左れば日本一國にて鎮國攘夷などを唱ふるは右に言へる百人の中

まし左れば日本一國にて鎖國攘夷など唱ふるは右に言へる百人の中

三人の仲間か又は風違の大名と少しも異なることなく唯世間の笑を取る許りにて此上もなき不外聞なれば能々前後を見合せ氣を鎮め心を落着けて勘辨すべきことなり

一外國と交易始りてより彼國無用の品を持來りて我國有用の物と引替るゆゑ國內の品物追々少なくなり就ては諸色高直諸人難澁すると言ふは世上一般通用の話なれども此亦物の道理を辨へざる人の妄りに觸流す空言にして能々其本を糺せば證據もなきことなり交易に彼國より積来る品は羅紗、吳紹服、更紗、金巾、天鷲絨、唐綾、鐵錫、ブリキ、藥種等なり日本より積出す品物は絹絲、茶、煙草、蠟油、樟腦、昆布、椎蕈、煎海鼠、鮑、鰐の鰭等なり右双方出入の品物を較るに何れが有用、何れが無用と云ふ差別もなし唯餘計のものと不足のものを取替るまでのことをて格別損得もあるまじ或は日本の絹物は貴く舶來の反物は下品に見ゆるな

と云ふものあれども此は唯品物の多きと少なきとに付き人の氣前の
 違ひたるに過ぎず先年中長崎一箇所交易ありし節は舶來品拂底、縮緬
 一反二兩なれば吳紹服の羽織地は五兩、唐綫も仙臺平より高直なりし
 に直段の高きほど好む人も多く其頃は世間の人皆仙臺平の袴に黒縮
 緬の羽織を着るよりも吳紹の羽織に唐綫の袴を貴く思ひ人の目にも
 好く見ゆたり（古渡りの品物は新物とは違ふなど云ふ者もあるべけれ
 様て二品物にても手に入るべき如何）左れば近來に至り俄に唐物を安く見
 下し縮緬仙臺平は有用吳紹服唐綫は無用と云ふ理屈もなかるべし勿論
 交易する者は双方町人の事なれば直段安く商賣にして引合ふ物を
 互に賣買するは町人根性當然の理、交易の始りたる當座は日本町人が
 内證にて頻りに銅を賣出さんとし（町人にて條約の禁制なり）彼國より綿
 を買込んだることありし處其後日本にて銅の相場高くなりたるに付き

當時は之を積出す者絶てなく假令ひ賣渡さんとしても直段が高ければ外國人も買はず又合衆國は綿の名産處にて世界中に積出し居たる處同國內亂に付產物拂底になりしより日本へも積渡らず却て一と頃は日本の綿を賣渡す様になりたり此節は又々模様替りたるや綿の積出し止みたる由此等は町人同士の掛引にて中々素人には分からず然るに青表紙の學者達が物知り顔にて何は無用、何は有用、之を賣ては國の損、之を買っては國の害なると彼是言ふは可笑しからずや町人の目から見たらば片腹痛しどこそ思ふべし尤も市中唐物見世など一見した所ではフランスコ、コツブ、繪鳴物、筒袖の古着など無用の玩物らしき品もあれども此等は交易品と云ふ程の物でもなく又此玩物あるとて大日本國の害にもなるまじ、さう云へば日本より漆器、竹細工、根付等の小間物は澤山外國へ渡り彼國の見世にも此等の玩物をかざり置き日本見世

とて其繁昌するは矢張り日本の唐物見世と同様にして強がち日本許
りに玩物を賣付け彼の國へは實用の物を持歸る譯にもあらず却て舶
來の醫法藥品などこそ人命にも拘はり必用の品とも云ふべし先年來
種痘にて人命の助りたるは云ふまでもなく近日は色々の名藥舶來し
て古來日本にては直り兼たる難病も其療治出來る由此は六かしき醫
師の話にて素人には分からぬ事なれども誰にも合點し易き一例を云
へば七八年前唐船の入津なき節大黃の相場俄に上り貧しき病人は中
々之を買ふべき手當もなく無據和大黃などを云ふ日本產の品を代用せ
し處少しも其功能なく却て腹痛する許りにて大に苦みたり然る處近
來交易始りしより大黃は品物澤山直段も安く如何なる貧乏人にとっても
和大黃などを飲で腹を痛むるに及ばず左れば世間銘々の子供へ種痘を
させて難痘を遁れ又先年和大黃に腹痛したる輩は義理にも外國交易

和大黄などを飲んで腹を痛むるに及ばず左れば世間銘々の子供へ種痘をさせて難痘をと遡れ又船船和太郎に貢をいたしたる輩は幾種にも外國を見た。

の事を悪くは云はれまじ又未來不祥の事ながら萬一不幸にして日本國中大饑饉あらば其時こそ思ひ當るべし先年奥州筋饑饉の節も數十萬の人餓死したり憐れなるは云ふまでもなく食物不足なるを以て人命を失ふとは國の爲め惜むべき事ならずや然る處斯く外國と條約を結で交易する上は其後何様なる天災の節は外國より米穀を積渡るは必定既に五六十年前英吉利國饑饉にて諸民難澁せし處亞米利加合衆國の官府より數艘の船を仕立て英國官府へ麥粉を贈て其國人を救ひしとありされば萬一の時日本にても假令ひ外國官府の惠を受けず金子を以て米穀を買取るとも先づ饑饉に餓死の心配はなく難有仕合と思ふべし○扱又諸色高直にて諸人難澁と云ふもの多けれども此も評判許りにて根も葉もなきこと、實は品物の直上りにあらず金の位の下りたるにて小判直上りの割合にすれば昔一兩の品物は此節三兩

か四兩にて丁度相當諸色の高直に付ては日雇賃も高くなり武家の拂
米も同様の割合にて何れも困る譯はなき筈なり實は交易始りてより
以來日本國中金銀の融通よく難澁するもの却て少なくなりたる其證
據は色々あれども先づ一二を云へば世柄惡しく渡世六かしければ給
金は安くとも喰ふ事が出來ざへすればとて奉公に出るもの多き筈な
るに近來世間に奉公入少なく道中の雲助迄も減じたるは全く奉公な
とするよりも別によき持ぎの道出來たるに非ずや既に奥州邊拾萬石
許りの或る大名にて領分より絹の賣出し追々増して一箇年にて九十
萬兩餘の高になりたる由拾萬石の人數を十萬人と積り平均一年一人
に付九兩づゝの金を得る姿なり誠に莫大の利益と云ふべし右に付其
領分にてはわれもくそ蠶を仕立中々奉公なせするものはなく何れ
も勝手向よくなり普請をしたり着物を買たり先年中麥飯を鹽にて食

したる者も當時は米の飯に肴を喰ふ様になり就ては米も魚類も高直となり米を作る百姓も魚を取る漁者も大工も左官も金廻りよく一國中世柄直りたる由右は奥州許りに限らず日本國中同様の事にて絹の出來ぬ國なれば綿を作り綿の出來ぬ土地なれば油種子を作り假令ひ外國交易に持出さぬ米でも麥でも日本國中廻り持の融通にて諸色賣捌よく百姓も職人も仕事に追はるゝ程忙しくなりたり日本に交易始りて世間一般の潤どなりたるを譬んには江戸に火事ありて鳶の者の喜ぶと同様の譯なり平生鳶の者は屈強の體なれ共火事がなければ仕方もなく溷渾へか道普請なぞして鬼角仕事なきに困る處へ一つ大火事があると地ならしの普請のとて俄に忙しく金廻りもよくなる故に不人情の事ながら朝夕火事のあるを祈るものなり日本人も一體國の土地柄はよく澤山に產物を作り出すことも疾くより心得居たれども

限りある一國中の事にて折角作り出しても賣捌出來兼るゆゑ無據先づ程々に持ぎ鳶の者にて言へば溷渾へ位の渡世を仕來りしに外國と交易始りて世界中に產物を賣出すと云ふ場合になりしより俄に仕事多くなり持げば金の取れることにて我れもくと思立ち火事後に鳶の忙しき様なり况して交易には火事もなくして仕事の多くなりたるなれば目出度き事ならずや此様子なれば年々產物も増し何程外國へ積出すとも更に差支なかる可し故に交易は我國一般繁昌の基と思ひ喜ぶべき事にて少し物心ある人は皆合點せる所なり然るに世上一般諸色高直にて難澁々々と唱るは何故なるやと考ふるに其本は皆人情の自分勝手より起りたる話に相違なし大抵世の中の人は自分に都合よき事なれば先づ隠すものにて金があるとて自慢する金持もなく、大儲けをしたと吹聴する町人もなし何か自分の身に付き不足あれば少

よき事なれば先づ隠すものにて金があるとて自慢する金持もなく大儲けをしたと吹聴する明人もなし何か自分の身に付き不足あれば少

しの事にても頻りに唱觸らし仰山に言ひなすは人情の常、當時諸色高直と云ふも矢張り交易の御蔭を以て好き事した所はだんまりにして置き取ても付かぬ外の事へ交易を引合に出し自儘勝手の愚痴を述ぶること、思はる又一つには諸色高直とはよき言ひ種にもなることあり物を賣るにも金を借るにも借金の催促をするにも催促の斷を言ふにも諸色高直に付き個様々々と云ひ又奉公人なぞ多く召使ふ家にても儉約をする云ひ種にもなり幸も不幸も都合好き言ひ種にて此節になりては譯けもなく朝夕の話に諸色高直といふ様に成りたるなり能く事の本を詮議して根もなきことにて世間の人を迷はさぬやうにするがよし

一 外國と附合始りてより日本國中の學者先生と云ふ先生は大概不殘海防策と云ふものを書き種々様々の理屈を述立て何でも唐人共へは

油斷が出來ぬ之を防がねばならぬ其趣向は今様々々濱邊に臺場を築き大筒を並べ木蔭から小筒を打つの唐人は船師は上手なれども陸に上れば河伯も同様いくぢはなし唐人が來たならば先づ相手にならずして陸に上らせそこで我方より兼て得道具の槍劍を以て之を塵にするがよし夫れよりも彼軍艦が來たらば此方より小船に乘て本船に漕ぎ付け船中へ飛乗て大筒も小筒も打たさぬ間に唐人共を不殘切殺し船も奪取るがよし又一段上の手に出る工風あり今様に異船が來てから打つ様な事では受身になる姿故日本にも軍艦を拵へて此方から出掛け先方を攻め序に地面も奪取るがよしと云ふ者あり或は又弱武者が取越し苦勞して逆も日本は小國にて五大洲には叶はぬ故早く降参するがよしなど大騒の話にて其有様を見るに何か外國と散々師でもした跡でまだ仲なほりも濟ず互に睨み合て居る様なり成程火を見た

した跡でまだ伸なほりも濟ず互に睨み合つて居る様なり成程火を見た
ら火事と思へ人を見たらば盜人と思へと云ふ謬もあれば初對面の外
國人何をするやら分らぬのを若しや賊ではあるまいかと我本國を大切に思ひ用心の餘り一旦の騒ぎは尤なれども今になりては最早月日も經たる事なれば能々心を落付けて考ふべし元來外國人の日本に來たる趣意は最初にも云へる如く日本國を盜み取りに來たではなし各國より當前の禮義を以て使者を差遣はし既に條約も取り結びたるとなれば隔意なく附合ひ篤と其意を察して如何にも最前使者を遣し條約を結びし時と同様の心得にて睦しく交はらんとするならば此上もなき次第此方よりも世界普通の道理に從て益々信實を盡すべし若し又さもなく此方から信實を盡しても先方は表向許りにて内心は日本本の土地をも奪取らんと思ひ不埒なる振舞を爲す國もあらば此等は世界の道理に背きたるものにて世界中の罪人なれば其道理を押立て

我日本國の威勢を張り之を追ひ拂ふとも其國を攻取るとも誰か何と言ふべきや斯く筋の立たる師なれば世間にて我國の方を尤なりとするは勿論時宜に依り加勢に來る國もあるべし敵は如何程大國なりとも少しも恐るゝに足らず唐土など此道理を知らず何でもかでも外國人は無法なるものと思込み伊勢參宮の田舎者が宿引を疑ふやうに深切にさるれば底氣味悪く思ひ理屈を云ふて聞かすれば無理を云ふとひ一から十まで疑心許りに凝り固まり互の實情は少しも通せず既に唐土阿片始末の節もいよ／＼阿片が國の害をなすならば先ず國中に阿片煙草はふかすことならぬと法度を出し其譯を英吉利へ篤と掛合ふて積渡を差留むるやう道理づくで談判せば莫吉利にても他國の害になることを構ひ付けぬ理屈はなし必ず穩に談判も行届きたる筈なるに林則徐と云ふ智慧なしの短氣者が出て自分の國中に法度を出す

になることを構ひ付けぬ理屈はなし必ず穩に談判も行屈きたる筈なるに林貢餘と云ふ智慧なしの短氣者が出て自分の國中に脚腰を出す

ことは先づさて置き、うもすも言はず英吉利より積渡りたる阿片を理不盡に燒捨て扱夫れより英吉利にても大に立腹して果ては師となり散々痛め付られたり今日に至るまで世界中に英吉利を咎むる者はなくして唯唐人を笑ふ許りなり是れ全く唐人が世間見ずにて道理を押立つることを知らざる己が不調法なれば自業自得誰に向て愚痴の述ぶべきやうもなし夫れに引替へ葡萄牙と云へる國昔は隨分繁昌したりしが近來は追々衰へ一國中の兵とて二三萬人蒸漬船も僅う四五艘に過ぎず其外都て國內の備向も手薄にて中々英吉利佛蘭西等の比類にあらず弱き國なれども古來よりの政事正しく外國と交るにも實意を盡して不都合なき故力づくならば英吉利でも佛蘭西でも唯一握みにせらるゝ筈なれども決して左様の事なく矢張り歐羅巴中にて各國と肩を並べて附合をする中に少しも引を取らず剩さへ掛隔りたる亞

細亞洲に瑪港と云ふ飛地領分まで支配し日本とも條約を結び中々好
き顔なり一と通り考へた所では歐羅巴諸大國の中に斯る弱き國の獨立
し居たらば方々より附睨はれて危うかる可しこそ思はるれども
道理を守るものは外より動かしやうもなし若し理不盡に之を攻取ら
んなどするものあれば必ず之を救ふものあり譬へば佛蘭西が攻めん
とすれば英吉利が救ひ露西亞が師を仕掛ければ佛蘭西が加勢を出す
な等にて手を出す者もなく長き月日を太平無事に過せり右に述る如
く先見ずの短氣にて前後を顧みず是非を辨へず無理なる師をすれば
敗軍の上に世界中末代まで耻辱を遺し唯一つの道理を守て動かされ
ば敵は大國にても恐るゝに足らず兵力弱くとも妄りに他人の侮りを
受くることもなしされば學者先生達も今少し勘辨して氣を廣く持ち
治にも亂にも守るべきは世界普通の道理なりと腹を据ゑて妄りに短

きを見て仰天したるに相違なし元來地圖の廣さと狭さとを見て國の
船等は無學丸旨にて何處が五大洲やら何れの國に軍艦大艦がある
やら少しも辨别なく唯横濱の噂と聞たり或は世界圖書に日本國のいか
きを見て仰天したるに相違なし元來地圖の廣さと狭さとを見て國の

受くることもなしされば學者先生達も今少し勘辨して氣を廣く持ち
治にも亂にも守るべきは世界普通の道理なりと腹と据るて安らぐに就

氣を起さぬやう謹むがよし扱又日本は小國にて逆も五大洲には叶はず殊に彼國には軍艦大砲等中々恐ろしき道具ありて力づくでは我國の及ぶ處にあらずなぞ憚る所もなく妄りに唱へ觸らすものあり一體此者等は無學文盲にて何處が五大洲やら何れの國に軍艦大砲があるやら少しも辨别なく唯横濱の噂を聞いたり或は世界圖杯に日本國の小さきを見て仰天したるに相違なし元來地圖の廣きと狭きとを見て國の大小を定むべからず亞非利加の砂原露西亞領の荒野なぞは唯貰ても仕方のなき地面夫れども世界圖には當り前の土地と同様に認めあるゆゑ此等を見て大國と思ふは大間違ひ實に國の大小強弱は其國住人の多少にあることにて人數の割合をすれば日本は世界中にて上の段の大國なり其故は世界の廣さ一里坪にて八百四十萬坪人の數は十億人其中にて日本の廣さは同二萬七千坪人の數は三千萬人あり扱其世

界の人数を平均して土地の廣さに配り附て見るに一里四方に百二十人の割合となり日本國中の人數を日本國中の地面に配り附くれば一里四方に千二百人程の割合となる左れば地圖でこそ日本は世界の三百分の一つ許りにて見る影もなき小國のやう思はるれども其實は全世界を三十に割りて其一分を押領する姿なり況して產物は澤山食物は勿論金銀銅鐵何に一つ不足なき富有の國にて世界中に恐るべき相手はなき筈なり左れども唯々久しく太平打續き獨り鎖籠りて世間に交はらず外國にては折々師もありて色々の事を發明し蒸氣車蒸氣船大砲小銃等を工風して本法に備立の出來たることも知らず一國限りにて學問と云へば唐土の書物を読み武術と云へば木刀や槍劍などを頼みにして居たるものゆゑ自然外國へ後れを取り我れ知らず恐ろしく思ふ様成行きたるなり故に今日にもせよ一番思立ち漢學や槍術な

頼みにして居たるものゆゑ自然外國へ後れを取り我れ知らず恐ろし
く聞ふ難能其如きなるなり故に今日にもせよ士の蓄思立ち實學や倫理のな

とは先づ次のことにして置き歐羅巴風に見習ひて蒸氣船も澤山に拘
へ大小砲も造立て海にも陸にも備を設け江戸は勿論大阪京都長崎箱
館等へ常々師の人数を盛に備置き萬が一にも外國より理不盡に無理
を仕掛けることもあらんには其時こそ道理づくにて之を打拂ひ又は
其國を攻め潰すとも世界中誰か一句の故障を言ふべきや光り耀く大
日本國と其威勢に恐れざるものはなかるべし

以上所記の全面を概して云へば吾々洋學者流の目的は唯西洋の事實
を明にして日本國民の變通を促がし一日も早く文明開化の門に入ら
しめんとするの一事のみ西洋人の爲めには恰も東道の主人と爲りて
彼の新事物の輸入取次を勤むるものゝ如くなれども拵大節に臨んで
洋學者が自から能く其身の獨立を守り曾て動搖することなきの事實
は掩ふ可らず蓋し治亂共に彼を知り我を知るの知識は正しく同一様

に發達するの約束にして彼を知ることいよ／＼明なれば我を思ふの
情も亦いよ／＼深からざるを得ず左に我慶應義塾中の一美談を語ら
んに維新の當年徳川將軍は東歸官軍は京師を發して東征の事と爲り
其軍勢は既に箱根を越えて富士川に近しなど江戸市中の人情惄々其
間に訛傳誤報は固より必然の勢にして官軍必ず亂暴ならんとは市中
一般の評判を成したるに付ては當時横濱に在る外國の公使館領事館
等に縁ある者は日本人にして之に雇はれ居る身分なりとの證明券を
貰ひ之に由て官軍亂暴の災を免かれんとする者多く中には外國人に
無縁の人までも手筋を以て内々之を貰ふたる歴々の人物もあり時に
余が友人尺新八と云ふ人は在横濱の米國公使ポルトメン氏と懇意に
して同公使の話に公使館の證明券が日本人の爲めに護身の効を成す
ことならば幾片にても之を利用して苦しからず漁々と人に與へよと

して同公使の話に公使館の證明券が日本人の爲めに護身の効を成すことならば歐洲にても之を利説して若しからず朝外と人に與へよと

の言を聞き得て余が宅に來訪米國公使より云々の言を承知したり就ては慶應義塾の學生等は此際如何する積りなるや若しも彼の證明券入用となれば周旋は甚だ易しと云ふにぞ余は直に之に答へず兎に角に一應塾中に話し又余が説も出して諾否を決せんとて夫れより尺氏と共に塾舎に行き衆學生の意見を叩きたるに小幡仁三郎(小幡篤次郎氏の實弟)十餘年前米國遊學中に病死眞先きに發言して云く米公使の深切は實に感謝に堪へずと雖も抑も今回の戰亂は我日本國の内事にして外人の知る所に非ず吾々は紛れもなき日本國民にして禍福共に國の時運に一任するこそ本意なれ東下の官軍或は亂暴ならんなれども唯是れ日本國人の亂暴のみ吾々は假令ひ誤て白刃の下に斃るゝことあるも苟も外國人の庇護を被りて内亂の災を免かれんとする者に非ず西洋文明の輸入は吾々の本願にして彼を學び彼を慕ひ畢生他事

なしと雖も學問は學問なり立國は立國なり決して之を混淆す可らず
 公使館の證明券に付き公使の好情深切は飽くまでも多謝する所なれ
 べし仁三郎は同窓の朋友と共に御断り申すと其語氣悲壯痛快、座中又
 一言を發する者なくして其まゝ止みたることあり其後官軍江戸に入
 りたれども萬事以前の評判に異なり軍律正しく兵士穩にして何等の
 靄暴もなかりしかども當時小幡仁三郎氏の一言は文明獨立士人の龜
 鑑なりとて永々塾中に傳へて之を忘るゝ者なし

以上概畧の記事終りて左に又余が著譯書を出版したる其時の事情に
 付き記憶に存するもの丈けを記し聊か以て世態今昔の變遷を知るの
 一助に供す可し

安政五年余が江戸に來りて初めて出版したるは華英通語なり是れは
 翻譯と云ふ可き程のものにも非ず原書の横文字に假名を附けたるま

安政五年余が江戸に來りて初めて出版したるは華英通語なり是れは
翻譯と云ふ可き體のものにも非ず其書の翻寫如本邦書類なると謂ひたる者

でにして事固より易し唯原書のVの字を正音に近からしめんと欲し
試にウワの假名に濁點を附けてヅヅと記したるは當時思付の新案と
云ふ可きのみ夫れは扱置き此書を出版して後に獨り自から赤面して
遺憾なりと思ひしは其凡例を漢文に認めたること、皇國又本邦の文
字に闕字したることなり畢竟原本が支那人の手に成りて都て漢文な
りしゆゑ自然に之に釣込まれたるか左りとは緒方先生の訓に背くも
のなりと心甚だ安からず又闕字の事は果して國法の命する所なるや
否や其邊の吟味もせずして漫に世間の先例に倣ふたるは習慣の奴隸
たるに過ぎず是亦輕率の至りなり左れば漢文は此度限りとして以後
を慎しむことに決心したれども闕字の要不要は容易に獨斷す可らず
斯る些細の事よりして奇禍を得たる先例は珍らしからぬことなれば
其筋に質問するこそ上策なれと思ひ當時著書調所(開成所)と名を改め

たる後か確に覺ゆずの主任教頭川本幸民先生を木挽町の私宅に訪ひ從來著書中に何か貴尊なる文字あれば闕字するの例あるが如し是れは國法の命する所にして背く可らざるものなるや否やと尋ねしに先生云く調所なぞには曾て其種の成規なし都て著者の思ひくなりと余は尙ほ念を押して然らば先輩の先例に拘はらず著譯書中闕字を全廢しても是れが爲めに著譯書の絶版を命ぜらるゝことなく著譯者の罪に陥ることもなきやと質したるに心配に及ばずとの明答は蓋し川本先生も洋學界自由思想の大家なれば口にこそ言はざれ闕字する勿れと暗に訓ふるものゝ如し余は之を聞得て欣喜に堪へず走て家に歸り爾後闕字は無用なりと決定して余が著譯書中華英通語を除くの外今日に至るまで古來學者流の弊習を免かれたるは今を去る卅八年前川本先生の賜なりと云ふ可し

り爾後闕字は無用なりと決定して余が著譯書中華英通語を除くの外
今日に至るまで古來學者流の點點を觸かれたるは今と去る卅八年前

西洋事情

西洋事情は余が著譯中最も廣く世に行はれ最も能く人の目に觸れた
る書にして其初編の如き著者の手より發賣したる部數も十五萬部に
下らず之に加ふるに當時上方邊流行の偽版を以てすれば二十萬乃至
二十五萬部は間違ひなかる可し今その出版に至りしまでの事情を陳
べんに余は前にも云ふ如く大阪緒方先生の門に蘭學を學び凡そ蘭書
なれば塾中にある醫書にても物理書にても之を解すること甚だ易く
原書に乏しき世の中なれば何か難解の原書はなきやと詮索し果ては
諸原書の序文又は緒言などを寫して同窓生と共に講じたる程の次第に
て原書を読み原書を譯するには先づ以て差支なし次で江戸に來りて
英書讀むことに志し特に教師とてもなく専ら蘭英對譯の辭書を相手
に辛苦二三年にして略英文をも解することに爲りしかばも蘭書なり
英書なり之を讀むは唯文法を本にし辭書に訴るのみにして其外に便

る可きものなきが故に彼國普通の語にして誰れにも知れ渡り殆んど辭書に註解するほどの必要なきものは正しく吾々日本人の最も解釋に苦しむ文字にして一文字の不審なるが爲めに全文の始末に當惑したるは毎々のことなり現に余が苦しみたる文字の一ニを云はんに大坂に居るとき何か兵書を見てバシスと云ふ蘭語あり(英語にベースと云ふ今日は根據地とでも譯することならん)幾度讀んでも分らず蘭辭書を引出し見ればバシスは本なり例へばアルカリがバシスにて硝酸はシユールなりなせありて化學の事のみ兵事に少しも縁なし逆も分らぬこと、斷念して其後江戸に來り誰れか兵書に明なる洋學者はなきやと諸方を尋ね下谷住居の石川平太郎先生は勢州津藩の爲めに専ら兵書を読み當時唯一の先生なりと聞き乃ち其門を叩て質問したれ共石川先生も矢張り文法辭書の學者にて質問者の分らぬ處は丁度先

して之にインなる打消しを冠すれば不直達の義なり夫れまでは解す可きなれども税に直達不直達とは何のことやら種々様々の辭書を調

きやと諸方を尋ね下谷住居の石川平太郎先生は勢州津藩の爲めに専
ら兵書を読み當時唯一の先生なりと聞き乃ち其門を叩て質問したれ
矣石川先生（矢張）だまひかくの學問（矢張）の點點（矢張）の點點（矢張）

生にも分らず又英書中にダイレクト タキス、インダイレクト タキス（直接
税、間接税の事なり）の語を見て少しも分らずダイレクトは直達の義に
して之にインなる打消しを冠すれば不直達の義なり夫れまでは解す
可きなれども税に直達不直達とは何のことやら種々様々の辭書を調べ
ても曾て註解したるものなく先輩老成の學者に質問しても終に説明を得たることなし左れば横濱居留の外國人に聞かんとするも幕府
の成規甚だ煩はしく内外人相互に文通さへ六かしき有様なれば書生
が文事の不審を質問するなせ逆も叶ぬことにして當時吾々讀書生の
不如意推して知る可し然るに文久元年の冬幕府より歐羅巴各國へ使
節を派遣することに決し余も亦其隨行を命ぜられたり翌年春先づ佛
蘭西に着し夫れより英、蘭、辛、露、葡等の諸國を巡回して文明の文物、耳目
に新ならざるはなし滞在中色々の人物にも面會して教を聽く中に

先方の人が念入れて講釋する學術上の事は先方の思ふ程に此方に珍らしからず例へば蒸氣機關は石炭の熱を以て水を沸騰せしめ其水氣の膨脹力を利用して器械を動かすものなり汽船は云々汽車は云々又電信は不思議なるやうなれども是れはエレキトルの氣を長き針金の線に傳へ線の一端に器械を動かせば線の長さは幾百幾千里あるも忽ち音信の記號を紙に印して云々と説明すること甚だ詳なるが如くなれども蒸氣電氣の如きは日本に在るとき出来る丈けの力を盡して其大體を講究し當時最近のフハラデー電池の事なども既に原書を熟讀して飽くまでも了解し居ることなれば外人の深切に説明する其厚意は有難けれども實は是等の講釋に旅中大切の時を費すに忍びず氣の毒ながら其邊は事に託して話を切上げ此方の専ら知らんと欲するは從前辭書を調べて詮索の届かざる事柄のみに在りと先づ大凡の方向

を定めて其方に取て掛り適當の人を見立て、質問を試るに先方の爲めには尋常普通分り切たる事のみにして如何にも馬鹿らしく思ふやうなれども質問者に於ては至極の難問題のみ例へば政治上せいじじょうに日本にては三人以上何か内々申合せ致す者を徒黨ととうと稱し徒黨は曲事たる可しと政府の高札からざつ法度の掲示場けいじじょうに明記して最も重き禁制なるに英國には政黨なるものありて青天白日、政權の受授を争ふと云ふ左れば英國にては處士横議よしわうぎを許して直に時の政法を誹謗するも罪せらるゝことなきか斯る亂暴にて一國の治安を維持するとは不思議千萬、何の事やら少しも分らずとて夫れより種々様々に不審ふしんを起し一問一答漸くして同國議院の由來帝室と議院との關係、輿論の勢力、内閣更迭の習慣等次第に之を聞くに從て始めて其事實を得たるが如く尙ほ未だ得ざるが如し滿目の人事唯不審のみにして法律は學者の學問なりと云ひ代

言人は他人の訴訟を引受け罪人の爲めに辯護する者なりと云ふも日本に居るとき公儀(幕府)に御大法百箇條あるを傳聞したるのみの書生には少しも分らず、民間商賣人の仕事に生命保險會社あり海上保險會社ありと云ふが如き成程面白き工風なりと思へども其仕組を詳にするは甚だ容易ならず彼の郵便事業の取調べに苦しみたるは今に記憶に存じて忘れず佛京巴理在留中に何れへか手紙を出さんとして其手續を偶然來客の一人に尋ねしに客は紙入より四角なる印刷の紙片を出し此印紙を手紙に張て出せば直に先方へ達す可しと云ふ夫れは飛脚屋へ頼むことかと問へば否などよ巴理にそんな飛脚屋はなし町内何れの處にも箱のやうなものあるゆゑ唯その箱の中に投すれば手紙は自然に表書の届先に届くと云ふいよ／＼不思議に堪へず江戸の飛脚屋京屋島屋に手紙を頼むに江戸より京大阪まで七日限りと云へば不審の歎りと質問し尙ほ合點行かずして重ねて詮問する等凡そ時を

は自然に表書の届先に届くと云ふいよ／＼不思議に塘へす江戸の飛
屋京屋島屋は手紙を筋りト江戸よりまたまで七日間りと云へ

書狀一本に付き金貳歩の定價なり日を限らぬものにても一本に付二三百文を拂ふことなるに佛蘭西では唯印紙を張れば手紙は恰も獨りで先方に届く扱々奇なりと無理に客を引留めて全體の次第柄を聞けども其日は要領を得ずして相分れ翌日は此方より客の家に出掛けて不審の残りを質問し尙ほ合點行かずして重ねて訪問する等凡そ時を費すこと三四日にして始めて腹に落ちて成程旨い通信法なりと獨り感心したるは他なし今日我國一般に行はる、郵便法なり其他病院、貧院、盲啞院、癡狂院、博物館、博覽會等目に觀て新奇ならざるものなく其由來其功用を聞いて心醉せざるものなし其有様は恰も今日朝鮮人が始めて日本に來りて觀る毎に聞く毎に驚くの情に異ならず朝鮮人は唯驚き去る者多けれども當時の吾々同行の日本人は驚くのみに止まらず其驚くと共に之を羨み之を我日本國にも實行せんとの野心は自から

禁じて禁ず可らず即ち余が歐羅巴滯在一箇年の間、到る處に筆記して歸來これを取纏め又横文の諸書を参考して著述したるものは西洋事情の一部なり

右の如く様々に見聞筆記したるは唯日本に歸り西洋出版の原書を讀んで解す可らず辭書を見ても分らぬ事柄のみを目的として一筋に其方向に心を寄せたることなれば固より事の詳なるを盡すに足らず都て表面一通りの見聞にして極めて淺薄なる記事なれども此淺薄なる記事が何故に大勢力を得て日本全社會を風靡したるやと云ふに當時我開國勿々上下共に適する所を知らず諸藩の有志者は維新の事を經營する最中にして其有志者は大抵皆藩中有爲の人物、祖先以來我固有の武士道に養はれて其活潑穎敏磊落不羈なるは殆んぞ天性にして大膽至極なれども本來支那の文學道義に入ること甚だ深からず儒學の

營する最中にして其有志者は大抵皆謹中有爲のノ物福矢以て大
の武士道に養はれて其活潑無敵石磊落不羈なるは殆んど天性にして大
事業を成して扱善後の一端に至り鎖國攘夷の愚は既に之を看
破して開國を決斷したれども國を開いて文明に入らんとするには何
か據る所のものなきを得ず流石の有志輩も當惑の折柄目に觸れたる
ものは近著の西洋事情にして一見是れは面白し是れこそ文明の計畫
に好材料なれど一人これを語れば萬人これに應じ朝に野に苟も西洋
の文明を談じて開國の必要を説く者は一部の西洋事情を座右に置か
ざるはなし西洋事情は恰も無鳥里の蝙蝠無學社會の指南にして維新
政府の新政令も或は此小冊子より生じたるものある可し事甚だ奇な
るに似たれども當時日本國中に西洋流の新思想を傳ふる版行の著書
とては粗漏淺薄ながら唯この冊子あるのみにして正に時の機會に投
じたると同時に其新説の容易に實際に行はれて故障を見ざりしは當

局士人の漢學に入ること深からずして一言これを評すれば其無學なりしが爲めなりと斷定せざるを得ず卷初に記したる如く緒方先生が日本國中の武家は大抵無學にして文字を知らずと云はれたるは實際の事實にして維新の有志輩が事を斷するに大膽活潑なる其割合に字を知ることは甚だ深からず假令ひ或は之を知るもの之を無頓着に附し去り一片の武士道以て報國の大義を重んじ苟も自國の利益とあれば何事に寄らず之を從ふこと水の低きに就くが如く舊を棄るに客ならず新を入れるゝに躊躇せず變遷通達自由自在に運動するの風にして淺薄なる西洋事情も一時に歓迎せられたる所以なり即ち日本士人の腦は白紙の如し苟も國の利益と聞けば忽ち心の底に印して其斷行に躊躇せず之を彼の支那朝鮮人等が儒教主義に養はれ恰も自大己惚の虚文を以て脳中縦横に書き散られたる者に比すれば同年の談に非ず

雷銃操法

左れば維新の當初我國の英斷は當局士人の多數が漢文漢學を味ふこと深からざりしが故にして奇語を用ふれば日本の文明は士人無學の賜なりと言ふも過言に非ざる可し

次に雷銃操法の由來を語らんに幕末に長州征伐の事ありて徳川の四天王と稱せられたる井伊神原等に出陣を命ぜられ何れも大切なる台命なれば如何で猶豫ある可き整々の陣堂々の旗以て中國路に繰出したれども其武器には舶來の鐵砲もあり和製の火繩筒もあり弓も槍もありて士氣の振ふと振はざるとは姑く擋き武器不渝の爲めに萬事意の如くならず之に反して長州勢は人數も少なく百姓共へ鐵砲を擔がせなどして至極見苦しきやうなれども武器は甚だ宜しく就中ライフルとて小銃の筒に筋ありて之に細長き椎の實丸を込めて發射する其勢は當る可らず徳川方の散々不利なりしは椎の實丸の力に敗したる

ものなりとて江戸中に評判高し余は之を聞いて獨り心に首肯きライフルの銳利は到底争ふ可らず數年を待たず數月の間にも軍陣にライフルは日本國中の流行たる可し何とかしてライフルの書を手に入れんと思へども横濱にも江戸にも尋常の洋書店に求め得べきものにあらず唯心に思ふのみにて日を送る中に爰に圖らずも奇縁を得たること不思議なれ其次第は江戸芝口伊勢源と云へる料理茶屋の向ふに和泉屋善兵衛なる書肆の老翁あり此翁が文明年中版行の中庸古註の一本を所有して曾て余に示したることあり余は中庸に用はなけれども文明は足利時代西洋にては紀元千四百七十年の頃にして其時の版本とあれば印刷歴史の材料として心醉せざるを得ず幾回か善兵衛に賣渡を迫れども老翁の物數寄書物屋にてありながら金錢には易へられずとて中々之を手離す氣色なし或日の事なり今日も亦老翁を口説て見

おれは自扁歴史の材料として心醉せざるを得ず幾回か善兵衛に賣渡
を迫れども老翁の物數寄書物屋にてありながら金錢には易へられず

んと芝口に出掛けて和泉屋の店に立寄りしに主翁が一冊の原書を持
出し是れは何の本なるやと云ふ其原書を見れば即ちライフルの書な
り難有しと心に喜び賣物なるや價は何程と尋れば少々損じたる古本
なれば二分三朱(三分二朱か覺えず)なりと云ふ心得たりと其云ふがま
ゝに直に代金を渡し急ぎ歸宅して書中を通讀すればライフルの事詳
かならざるなし然るに爰に不都合なるは余が本來武家に生れながら
鐵砲を知らず之を發射したことなきのみか家に其物なければ之を
手に觸るゝ機會もなし况してライフルの如き目に見たることさへな
し其物を知らずして其書を翻譯とは餘り鐵面皮なりと思ふ處に偶ま
余が妻の實弟に土岐謙之助とて一少年あり先日椎の實丸の筒を新調
して江川太郎左衛門殿の屋敷に打方の稽古するよしを聞き乃ち之に
鐵砲を持參するやう申遣はし之を見れば果して施條ライフルなり依

て少年に問ふやう江川にて足下達が打方の稽古したる跡にて掃除は
如何する都て銃器の取扱ひに規則あるや否やと尋るに何も規則とて
はなし稽古終れば井戸側にて筒を洗ひ、鏽が見ゆれば磨砂にて磨き何
か工合のわるきどきは釘拔鐵鎗火箸などを用ひて筒を取りほぐすことを
もありと云ふ左れば此筒には何か附屬品ある筈なり之をも持來れど
申付け扱少年に向て拙者の言ふがまゝに此筒を解潰し見よとて余は
原書を手にして差圖し先づ其螺旋を抜け、次ぎは之を抜て其金物を外
し云々と次第に進み行き鐵砲は遂にばらくに解けたり夫れより今
度は組立なりとて又以前の如く順々に差圖して難なく元の鐵砲に蘇
生したるにぞ少年は大に驚き是れは不思議なり妙法なりとて稱讚止
まず余は此一事を以て大にライフル銃の事を了解し勿々執筆急ぎ翻
譯して出版せしに果して時勢の必要に投じて發賣の數、幾萬なるを知

生したるにぞ少年は大に驚き是れは不思議なり妙法なりとて稱讚止
まず余は此一事を以て大にライフル銃の事を了解し外々熟練急ぎ職

らず江川の稽古場にても銃器の取扱ひに多少新知識を得たることならん其後凡そ二十年を過ぎて明治十七年の冬府下小石川の砲兵工廠を一見したるとき村田少將に面會の語次少將云く自分が壯年時代始めて砲術に志を立てたるときには雷銃操法に數へられたること多しとて主客一場の笑を催ほしたることもあり操法の譯者は生來鐵砲を手に觸れたることなき男にして眞實紛れもなき素人なり此素人の手に成りし譯書が日本第一、世界に大名を擧げたる砲術家の爲めに多少の利益を與へたることありとは是れぞ浮世の奇遇にして所謂不龜手の薬なる可し

安政六年の冬余は始めて米國に航海し文久元年冬歐羅巴に渡り次で慶應二年冬重て米國へ渡航のとき幕府公用の爲めに米國に持參する爲換の事を頼まんとて横濱の外國商人ウールスフール會社に至りて

爲換云々を申入れしに直に承諾幾千兩の金を渡せば之を請取り爲替手形として此方に授けたる紙片を見るに金の數に相違もなく先方にて直に渡すと明記して文意は能く了解したれども其先方はバンクヲブイングランドとありて確と當惑したり此方共は英國に行くにあらす米國に渡る者なり夫れに英國銀行の爲替を渡されては困ると難ずれば會社員は笑ひながら御心配に及ばず此手形さへあれば米國の何れの銀行にても金は滞りなく直に渡します云々と辯すれども生來千を以て計る大金を取扱ひしこともなく日本に行はるゝ金錢取引の習慣さへ知らざる士族書生に外國爲換の手續、逆も容易に合點す可きに非ず左りとて金は大切なり其歸する所を明にするこそ肝要なれど思ひ會社員と相對して一問一答凡そ二時間ばかり費して漸く釋然たるを得たり時に會社員の云ふやう君は餘程了解の早き人なり既に昨

に非ず左りとて金は大切なり其歸する所を明にするこそ肝要なれど
思ひ會社員と相對して一問一答凡そ二時間ばかり費して漸く釋然た
るを得たり時に歸國の云ふやう君は筆記作成の事も人なり既に作

日も爲換の依頼者ありて其説明に半日を丸潰にして遂に分らずに歸
りたり云々と余は此言を聞いて心中竊に赤面に堪へず夫れ是れの事を
思ひ今度の渡米中には勉めて通俗日常の事柄に注意し他日若し西洋
諸國に旅行する人もあらば旅中の心得に爲る可き事を参考に供し自
身に覺えある赤面を免かれしめんとの微意を以て綴りたるは即ち西
洋旅案内なり

窮理圖解

開國の初に當り吾々洋學者流の本願は兎も角も國中多數の人民を眞
實の開國主義に引入れんとするの一にして恰も西洋文明の爲めに
東道の主人と爲り一面には漢學の固陋を排斥すると同時に一面には
洋學の實利益を明にせんことを謀り、あらん限りの方便を運らす其中
にも凡そ人に語るに物理の原則を以てして自から悟らしむるより有
力なるはなし少年子弟又は老成の輩にても一度び物理書を讀み或は

其説を聽聞して心の底より之を信するときは全然西洋流の人と爲りて漢學の舊に復歸したるの事例殆んど絶無なるが如し吾々實驗の示す處なれば廣く民間を相手にして之を導くの第一着手は物理學に在りと決定はしたれども無數の國民に原書を讀ましむるが如き固より思ひも寄らぬことにして差向きの必要は唯翻譯書を示すの一法あるのみ然るに開國以前既に翻譯版行の物理書なきに非ざれども多くは上流學者社會の需に應ずるものにして其文章の正雅高尚なると共に難字も亦少なからず且つ翻譯の體裁専ら原書の原字を誤るなからんことに注意したるが爲めに我國俗間の耳目に解し難きものあり例へば物の柔軟なるを表するに恰もボートル(英語バタ)に似たりと直に原字のまゝに翻譯するが如き譯し得て眞を誤らざれども生來ボートルの何物たるを知らざる日本人は之を見て解するを得ず依て余は其原

ば物の柔軟なるを表するに恰もボートル(英語バタ)に似たりと直に原字のまゝに翻譯するが如き譯し得て眞と誤らざれども生來ボートル

字を無頓着に附し去りボートルと記す可き處に味噌の文字を用ふることに立案して凡そ此趣向に従ひ當に二三の原字のみならず全體の原文如何を問はず種々様々の物理書を集めて其中より通俗教育の爲めに必要なりと認るものを作抄し原字原文を餘處にして唯その本意のみを取り恰も國民初學入門の爲めに新作したる物理書は窮理圖解の三冊なり

洋兵明鑑

洋兵明鑑は單に一部の兵書なれども其翻譯に就ては大に事情の存するものあり慶應義塾は元と江戸鐵砲洲奥平藩邸に在り鐵砲洲を去て芝新錢座に移りしは慶應四年の春明治改元の前なりしが時は恰も維新の兵亂最中にして新錢座新塾の經營も唯僅に成るのみ然るに入學生の来るは日に多數にして逆も之を容るゝに足らず是非とも一棟の塾舎を新築すること必要なれども所謂先きだつものは金にして以前

の經營に有金は既に使ひ盡し、間もなく更らに新築とは實に當惑の次第にして夫れ是れと思案の折柄、熊本藩中に知る人ありて其士人の平生、兵事を好み或日私宅に來訪、何か新舶來に面白き兵書はなきやとの話に應じ偶然余が手許に持合せの原書を示し是れは云々の書なり之を翻譯しては如何と云ふに先方は大に悦び早速翻譯上木を頼むとのことにて夫れより上木出來の上は熊本藩にて何百部を引取ることに約して相別れ事急なれば一人の手にては間に合はず乃ち小幡篤次郎其實弟故仁三郎の兩氏と余と三名にて同時に勿々着手し勿々版行したるは洋兵明鑑五冊にして約束の如く其何百部を熊本藩に納めて請取りたる金高六百圓ばかり恰も天與の資金にして直に塾舎の新築に取掛り當時物價も今と違ひ下直なることなれば凡そ六百圓の金を以て二階立の一棟を立派に建築し疊建具も入れて大に學生の便利を成

の官邊にも何か會議様の事を思ひ立ち時の政府の改進は大に加わる
れて其事を謀り恰も一時の折柄、或日雜誌の語か某氏の云ふに何か外國
一士人某に交り毎度往來の折柄、或日雜誌の語か某氏の云ふに何か外國

取りたる金高六百圓ばかり恰も天與の資金にして直に塾舍の新築に
取扱り當時物價も今と違ひ下値なることなれば凡そ六百圓の金とい

したり右の次第にて此譯書は單に熊本藩を目的にして思立たること
なれば世間一般に發賣は甚だ多からず自から他の出版書と事情を殊
にするものなり

議事院談

英國議事院談は英國々會の有様を一通り記したるものなり當時日本
の官邊にも何か會議様の事を思立ち時の政府の改進流は大に力を入
れて其事を謀り恰も一時の流行談を成したるが如し其時余は紀州藩の一
士人某に交り毎度往來の折柄、或日雜話の語次某氏の云ふに何か外國
にて國事を評議する手續體裁を記したる原書はなかる可きや若しも
其書を得て翻譯にでもなれば最も妙なり實は方今官邊には云々の必
要ありとの話に余は之に即答し夫れば原書もあり翻譯も易し直に版
本にして御目に掛けんとて相別れ夫れより家にある種々雜多の原書
を取集め英國々會に關する部分を夫れ是れと見合せ、接ぎ合せ、腹案既

に成りて筆を執り同時に版下書、版木師に命じて彫刻の用意を爲さし
め翌日二三枚の原稿出來すれば即刻版下に廻はし、版下を書き終れば
直に版木師に渡して彫刻せしめ、彫刻成れば版摺に渡して幾百枚を印
刷せしめ、其翌日も又その翌日も斯の如くにして凡そ著者の執筆した
る原稿は三枚にても五枚にても一週間を出でずして印刷に上るの趣
向にして毎日曾て怠ることなく其間版下書、版木師、版摺等一切の職工
に向ては錢を吝まず其言ふがまゝに割合を與へて晝夜の別なく勉強
せしめ主人の勉強と共に職人等も休息するを得ず斯くて著者が始め
て執筆起稿の其日より一切の事を終りて議事院談二冊の製本何百部
を得たるまでの日數は僅に三十七日を過ぎず木版彫刻の時代に斯る
速成は古來未曾有の異例なりと云ふ可し而して當時の事情に於て出
版物を急ぐは著譯社會一般普通の人情なれども特に本書に限りて斯

乗じ他人の成し得ざる事を成して見んとの好奇心に出でたることとな
らん今にして思へば自分にも分らず唯一笑に附す可きのみ

て執筆起稿の其日より一切の事を終りて議事院談二冊の製本何百部を得たるまでの日數は僅に三十七日を過ぎず木版駄刻の時代に斯る

くまでも性急にしたる理由ありしとも覺えず唯著者が壯年の氣力に乘じ他人の成し得ざる事を成して見んとの好奇心に出でたることならんにして思へば自分にも分らず唯一笑に附す可きのみ

世界國盡

幾千百年來蟄居の人民が俄に國を開て世界に交らんとするには先づ其世界の何物にして何れの方角に位するやを知り其地名を知り其遠近を知るは最も大切なことにして前年は唐天竺とて世界の末端と心得たりしに今は唐天竺の外に歐羅巴、亞米利加等も出現し來り隨て人の眼界は舊時に幾倍して廣からざるを得ず眼界の廣きは取りも直さず世界を狭く思ふことなれば兎に角に全國民をして世界を觀るほど日本國內を觀ると同様ならしめんと欲し之に就ては江戸の各處に在る寺子屋の手本に江戸方角又は都路とて府下東西南北の方角地名等を記し、東海道五十三驛の順序を五字七字の口調もて面白く書綴り、

兒童をして其手本の文字を手習するど共に其文句を暗誦して自然に地理を覚えしむるの慣行にして江戸方角都路と云へば江戸中の貴賤貧富に拘らず毎戸毎人これを知らざる者なき程の次第なれば余は之を見て獨り首肯きよしゝ日本國中の老若男女をして世界の地理風俗を知ること江戸の方角地名、東海道の五十三驛を暗誦するが如くならしめんとの一案を起し俄に書林に就て江戸方角都路の版本を求め幾度も之を熟讀暗誦して乃ち其口調に倣ふて綴りたるもののは世界國盡なり本文のみにては盡さるが故に頭書を加へて凡そ各地の風俗歴史等の荒増しを記したれども、文章は極めて通俗を主として苟も難字を用ひず紛れもなき寺小屋流の體裁なりと信す

序ながら一事を記さんに右の如く世界國盡は俗中の俗文、自分の目にも可笑しく見ゆる程なれば世間の儒流は無論洋學社會にも必ず之を

は、鄭文肅譜のとなり國盡の本書に不似合なる翻譜の英文字を翻譜して世間に示したらば自から本書の重きを成すことあらんかと思案の末、米國學士ワルブランク氏の一文を譜し序文の代りとして卷首に掲

字を用ひず紡れもなき寺小屋流の體裁なりと信す
前ながら一事と記せんに右の如く世間は俗物の欲なき自分の目

學問のすゝめ

嘲り笑ふ者あるべし是れも平氣に構へて馬耳東風に附し去れば夫れ
迄なれども出來ることならば何か一策と考ふる中に不圖思付きたる
は英文翻譯のとなり國盡の本書に不似合なる難解の英文字を翻譯し
て世間に示したらば自から本書の重きを成すこともあらんかと思案
の末、米國學士ワルブランク氏の一文を譯し序文の代りとて卷首に掲
げたり今日の洋學界に是式の英文を譯するは固より容易なれども三
十年前には隨分骨の折れたる業なり亦是れ著者一時の好事のみ
學問のすゝめは一より十七に至るまで十七編の小冊子何れも紙數十
枚ばかりのものなれば其發賣頗る多く毎編凡そ二十萬とするも十七
編合して三百四十萬冊は國中に流布したる筈なり書中の立言往々新
奇にして固より當時の人氣に叶はず上流社會の評論に於ても漫語放
言として擯斥するもの多し殊に明治六七年の頃より評論攻撃ます

甚だしく東京の諸新聞紙に至るまでも口調を揃へて筆鋒を差向け日に其煩に堪へず畢竟世間の讀者が文章の一宇一句を見て全面の文意を玩味せず記者も亦數枚の小冊子に所思を詳にする所能はずして双方共に堪へ難き次第なれども毎人に向て語る可きにあらず唯そのまゝに打捨て置く中に明治七年の末に至りては攻撃罵詈の頂上を極め遠近より脅迫状の到来、友人の忠告等今は殆んど身邊も危きほどの場合に迫りしかば是れは捨置き難しと思ひ乃ち筆を執りて長々しく一文を草し同年十一月七日慶應義塾五九樓仙萬の名を以て朝野新聞に寄書したるにぞ物論漸く鎮まりて爾來世間に攻撃の聲を聞かず蓋し從前盛に攻撃したる者も又攻撃せられたる者も唯双方の情意相通せざるが爲めに不平を感じるのみ苟も其眞面目を明にして相互に會心するときは人間世界に憎む可きものもなく怒る可きものもなきの

近來福澤氏所著の學問のすゝめを諷諭するもの多く而して其鑑を向くる所は其第六編と七編なるが如し世の識者固より各其所見を述ぶ

事實を知るに足る可し今その寄書の全文を記すこと左の如し

學問のすゝめの評

近來福澤氏所著の學問のすゝめを論駁するもの多く而して其鋒を向くる所は其第六編と七編なるが如し世の識者固より各其所見を述ぶるの權あり余輩敢て其駁者を駁して以て一世の議論を籠絡せんとするに非ざれども識者或は此書の通編を見ざるのみならず其駁論の目的とする所の六七編をも通覽吟味せずして唯書中の一章一句に就き遽に評を下すに似たるもの多し是余輩が爰に一言を述べ世に公布する所以なり

學問のすゝめ第六編は國憲の貴き由縁を論じて私裁の惡弊を咎め國民の身分を以て政府の下に居るときは生殺與奪の政權をば悉皆政府に任して人民は此事に就き秋毫の權ある可らず其趣意を廣めて極度

七十八

に至れば假令ひ我家に強盜の犯入することあるも妄に手を下すの理なしとまでに論じて痛く私裁の宜しからざるを述べ卷末に赤穂の義士並に政敵の暗殺等を出して其例を示したるなり余輩の第六編を解すこと斯の如し

第七編は卷首に云へる如く六編の補遺にて其趣意は人の了解に便ならしめんがため人民の身分を主客の兩様に分ち客の身を以て論すれば苟も政府の憲法を妨ぐ可らず既に彼を政府と定め此を人民と定め明治の年號を奉じて政府の下に居る可しと約束したる上は假令ひ政法に不便利なることあるも其不便利を口實に設けて之を破るの理なしとて専ら政府たるものゝ實威を主張し又主人の身を以て論すれば政府の費用を拂ふて銘々の保護を託したるものなれば損徳共に之を人民に引受けざる可らず政府の處置に不安心なることあらば深切に

ときは人民の身分に於て如何に爲し共に之を爲りしりんとするの
卷の半に至て政府の變性を説き政府若し其本筋を忘れて暴政を行ふ

法に不便利なることあるも其不便利を口實に設けて之を破るの理な
して専ら政府たるものゝ實威を主張し又主人の身を以て論すれば
政府の實威を藉りて國の保護を爲したるものなれば當然矣と

告げて遠慮することなく穩に之を論す可として日本の人民何れも皆
この國を以て自家の思を爲し共に全國の獨立を守らしめんとするの
趣意なり

卷の半に至て政府の變性を説き政府若し其本分を忘れて暴政を行ふ
ときは人民の身分に於て如何す可きやと難題を設けて之に三條の答へ
を附し第一節を屈して暴政に伏すれば天下後世に惡例を遺し全國の
衰弱を致す可きが故に國を思ふの赤心あらん者は斯る不誠實を行ふ
可らず第二然らば則ち腕力を以て其暴政に抗せん歟内亂の師は禍の
比す可きものなし決して行ふ可らず第三人民の身として暴政府の下
に立つには正理を守て身の痛苦を憚らず「マルナルドム」の事を爲す可
して嚴に人民の暴舉を制し腕力に依らずして道理を頼み理を以て
事物の順序を守らんとするの趣意なり此一段は亞國〔ウェーランド〕氏

修身論第三百六十六葉の抄譯なれば今原文の續きを譯し其意の足らざる所を補ふて之を示さん同書第三百六十七葉の文に云く英國にて第一世「チャーレス」の世に國民政府の暴政に堪へず物論蜂起して遂に内亂の戰争に及び王位を廢して一時共和政治と爲したれども人民はこれがために自由を得たるに非ず其共和政治も數年にして止み第二世「チャーレス」を立るに及で國政は益々專制を主張し英人は恰も自由を求て自由を失ひ暴を行て暴政を買たる者の如し内亂の不良なることを以て知る可し第二世「チャーレス」の時代には人民其氣風を改め腕力に依頼せずして道理を唱へ理の爲めに身を失ふ者比々相續き「マルチルドム」の功德を以て今の英國に行はるゝ自由獨立の基を開きたりと卷末は此「マルチルドム」の話なり内亂の師と「マルチルドム」と比較して其得失如何人間の行ひに於て忠義は貴ぶ可きものなれども唯一命を

云はざるを得ず忠臣義士の死も死なり援助の死も死なり然ば卯ち

ルドムの功徳を以て今の英國に行はるゝ自由獨立の基と開きたりと
勵精は此マードムの説なり歎觀の節とアラドムの歎觀し

さへ棄れば忠義なりとて一筋に之を慕ふの理なし忠僕が縊死も其時
の事情を考への外に置いて唯其死の一事に就て之を見れば忠義の死と
云はざるを得ず忠臣義士の死も死なり權助の死も死なり然ば即ち權
助の死は人の手本とも爲る可きもの乎決して然らず狹介の犬死のみ
其之を犬死とするは何ぞや世の文明に毫も益することあらざればな
り扱忠臣義士の談に亘り古の歴史を見るに國のため人のためにとて
身を殺したる者は甚だ多し北條の亡びたるとき高時自殺して從死
する者六千八百人とあり高時は賊にても此從死したる者は北條家の
忠臣と云はざるを得ず其他武田上杉の合戦にも雙方共に君の爲めに
身を殺したる者は擧て計る可らずと雖も今日より之を論すれば何の
ために死したるか假りに今日の日本にて甲越の戰争起ることあらば
其討死の士は之を徒死と云はざるを得ずとの趣意なり

又外國の例を引て其意を足さん在昔佛蘭西及び西班牙にて宗旨のために戦争を起し君命を以て人を殺し君命を重んじて身を殺したる者は幾千萬の數を知る可らず其人物の誠忠は實に天地に耻るなしと雖も開明の今の歐洲の眼を以て見れば宗旨論に死する者は之を犬死と云はざるを得ず

右の如く忠臣義士の死を徒死と爲し犬死とするは何ぞや當時未開の世に當り人の目的とする所のもの各其一局に止て一般の安全繁昌に眼を着するに至らざればなり、こは人の罪に非ず時の勢なり古に在ては忠死なり今に在ては徒死なり故に後世より之を觀れば其志は慕ふ可くして其勸は則どる可らざる者なり朝野新聞第三百六十八號愛古堂主人の評論中に前略事柄に於て決して其目的ある可らず此禁止の辭解し難しとあれども時勢の沿革文明の前後を察すれば數百年の上

し其目的あらざればとて之を古人の職と云ふ可らず又今日に至ては文明の事物大に見る可きものありと雖もこれを以て今人の面目と爲し

は忠死なり今に在ては徒死なり故に後世より之を觀れば其志は慕ふ
可くして其勵は則どる可らざる者なり朝野新聞第三百六十八號愛古

に在て其人物に今の文明の目的あらずと云ふも萬々差支あることなし
其目的あらざればとて之を古人の耻と云ふ可らず又今日に至ては
文明の事物大に見る可きものありと雖もこれを以て今人の面目と爲
し今人は古人に優るとて誇るの理なし古人は古に在て古の事を爲し
たる者なり今人は今に在て今の事を爲す者なり共に之を人類の職分
と云はざるを得ず

楠公の事は學問のすゝめ中に其文字なしと雖も世論の所見に次て之
を論せん公の誠忠義氣は又喋々論するを俟たず福澤氏は楠公と權助
とを同一の人物なりと云たる乎元弘正平の際に公の外に權助あらば
其功業に優劣なしと云たる乎筆端に記せざるは勿論言外にも其意味
を見ず氏が立論の眼目は時勢の沿革文明の前後に在るものなり其忠
臣義士と權助とを比したるは唯死の一事のみ譬へば義士は正宗の刀

の如く權助は鎧たる庖丁の如し死の一事を以て論すれば正宗も庖丁
も共に其地金は鐵なれども其効と品柄との輕重を論じて之を同時同
處に置く時は雲壤懸隔固より比較す可らず啻に理に於て不都合のみ
ならず之を聞いて先づ捧腹す可きに非ずや苟も人心を具したる者なれ
ば是等の辨別はある可し元弘正平の際に楠公が功業を立てたるは此
寶刀を燿かしたる者にて王室のために謀れば全國この燿光の外に見
る可きものなし然らば則ち公の貴き所以は其死に非ずして其効に在
るなり其効とは何事を指して云ふや日本國の政權を復して王室に
歸せんとしたる効なり此時代に在ては公の舉動毫も間然す可きもの
なし其分を盡したる者と云ふ可し

然りと雖も爰に時勢の沿革を考へ元弘正平年中と明治年中とを持出
して日本國人の當に務む可き効を論すれば大に異なる所なかる可ら

天子あり往古より如何なる亂臣賊子にても直に天子の位を窺ふもの
又足利なり結局日本國內の事にて然も血縁を以て論すれば北朝にも

なし其分を盡したる者と云ふ可し
然りと雖も影に附勢の微まを考へ元弘正平年中と明治年中とを擇出

す元弘正平の際に王室政權を失ふと雖も之を奪ひたる者は北條なり
又足利なり結局日本國內の事にて然も血統を以て論すれば北朝にも
天子あり往古より如何なる亂臣賊子にても直に天子の位を窺ふもの
なきは公も自から信することならん然りといへども公は尙これを以
て満足するものに非ず飽くまで正統を爭ふて其權柄を王室に復せん
とし力盡て死したるものにて其一局の有様を想へば遺憾限りなしと
雖も其政權は遂に去て外國人の手に移るに非ず外に移らざるものは
再び復するの期もある可ければ公は當時失望の中にも自から萬分一
の望をば達したることならん故に明治年間に在る日本人の所憂を以
て元弘正平の時勢を見れば尙忍ぶ可きものありて楠公の任は今の人
本人の責よりも軽しと云ふ可し是亦時勢の沿革文明の前後なり思は
ざる可らず目今の有様は實に我國開闢以來尤も始めにして最も大な

る困難に當りたる時勢なり

抑も明治年間の日本人にて憂ふ可きものとは何ぞや外國の交際即是
れなり今外交の有様を見るに商賣を以て之を論すれば外人は富て巧
なり日本人は貧にして拙なり裁判の權を以て論すれば動もすれば我
邦人に曲を蒙る者多くして外人は法を遁るゝ者なきに非ず學術も彼
に學ばざるを得ず財本も彼に借らざるを得ず我は漸次に國を開て徐
々に文明に趣かんとすれば彼は自由貿易の旨を主張して一時に内地
に入込まんとし事々物々彼は勵を仕掛けて我は受け身となり殆ど内
外の平均を爲す能はず此勢に由て次第に進み内國の人民は依然とし
て舊習を改ることなくば假令ひ外國と兵革の釁を開かざるも或は我
國權の衰微なきを期す可らず况んや萬一の事故あるに於てをや之を
思へば亦寒心す可きに非ずや

と云て其職分を終れりと爲す可きや余輩の所見は決して然らず元弘
正平の政權は尊氏に歸したれども明治の日本には尊氏ある可らず今
猶故は當然として西洋諸國に在て存せり本書第三編に云ふ所の大

外の平均を爲す能はず此勢は由て次第に進み西國の事に於てとや之と
て舊習を改ることなくば假令ひ外國と兵革の費を開かざるも或は我
國の獻徵なきを期す可らず況んや萬一の事故あるに於てとや之と

此困難の時勢に當り日本國民の身分において事あれば唯一命を抛つ
と云て其職分を終れりと爲す可きや余輩の所見は決して然らず元弘
正平の政權は尊氏に歸したれども明治の日本には尊氏ある可らず今
の勁敵は隱然として西洋諸國に在て存せり本書第三編に云ふ所の大
膽不敵なる外國人とは蓋し此事ならん今の時に在て我國の政權若し
去ることあらば其權は王室を去るに非ずして日本國を去るなり室を
去るものゝは復するの期ありと雖も國を去るものは去て復た返る可ら
ず印度の覆轍豈復た踏む可けんや事の大小輕重に眼を着す可きなり
此困難の時勢に當り楠公の所業學ぶ可きや余輩の所見は決して然ら
ず公の志は慕ふ可し其勵は手本と爲す可らず前の譬にも云へる如く
楠公の勵は猶正宗の刀の如し刀劍の時代には固より此刀を以て最上
の物と爲す可しと雖も時代の變革に從へば寶刀も亦用を爲す能はざ

るの勢に移るが故に別に工夫を運らすことなかる可らず即是れ變遷の道なり公の時代には外國の患なし其患なければ之に應するの工夫も亦ある可らず公の罪に非す決して之を咎む可らず然るに今世の士君子古の忠臣義士を慕ひ其志を慕ふの餘りに兼て其効をも學ぶ可きものゝ如く思ひ古の効を以て今の時務に施し毫も工夫を運らすことなくして其まゝに之を用ひんとする者あるが如し其趣を形容して云へば小銃の行はるゝ時節に至て尙古風の槍劍を用ひんとするに異ならず余輩の疑を生ずる所以なり余輩の眼を以て楠公を察するに公をして若し今日に在らしめなば必ず全日本國の獨立を以て一身に擔當し全國の人民をして各其權義を達せしめ一般の安全繁昌を致して全體の國力を養ひ其國力を以て王室の連綿を維持し金匱無缺の國體をして益々其光を耀かし世界萬國と並立せんとて之を勉むることなる

一死を期するのみにて可ならんや必ず千狀萬態の變通なかる可らず
即ち今日魯英の軍艦をして兵庫の港に侵入することあらしめなば楠

し全國の人民をして各其權義を達せしめ一般の安全繁昌を致して全體の國力を養ひ其國力を以て王室の連綿を維持し金甌無缺の國體と
可し今之文明の大義とは即ち是なり此大事業を成さんとするに豈唯一死を期するのみにて可ならんや必ず千狀萬態の變通なかる可らず假に今日魯英の軍艦をして兵庫の港に侵入することあらしめなば楠公は必ず湊川の一死を以て自から快とする者に非ず其處置は余輩の敢て測る可きに非ざれども別に變通の策あること斷じて知る可し結局死は肉體の働くなり匹夫も溝瀆に經るゝことあり變通は智慧の働く時勢の沿革事物の輕重を視るの力なり楠公決して匹夫に非ず今日に在らば必ず事の前後に注意し元弘正平の事に微はずして別に舉動もあり別に死所もある可し概して云へば元弘正平の事は内なり明治の事は外なり古の事は小なり今の事は大なり是即ち公の働く元弘と明治とに於て異なる可き所以なり故に楠公の人物を慕ふ者は假に之を今の世に摸寫し出し此英雄が明治年間に在て當に爲す可き働く想

像して其勵に則らんことを勉む可し斯の如くして始めて公の心事を知る者と云ふ可し元弘正平の楠公を見て公は數百年の後今日に至ても尙同様の勵を爲す可き者と思ふは未だ公の人物を盡さずして却て之を蔑視する者と云ふべし公の爲に謀りて遺憾なきを得ず結局公の誠意は千萬年も同一なりと雖も其勵は必ず同一なる可らず楠公の楠公たる所以は唯この一事に在るのみ

變通と云はる血氣の少年輩は遽に之を誤り認めて鄙怯なる遁辭など思ふ者もあらんがよく心を平にして考へざる可らず弘安年中に北條時宗が元使を斬たるは之を義舉と云て妨げなからんされども此義舉は弘安に在て義舉なり若し時宗をして明治年間に在らしめ魯英の使節を斬る歟又は明治の人が時宗の義舉を慕ふて其義に倣ふことあらば如何ん之を狂舉と云はざるを得ず均しく外國の使節を斬ること

激戦にても便ならざるはなし何物にても不便利ならざるはなし變通
激戦にても便ならざるはなし何物にても不便利ならざるはなし變通

但時宗が元徳を轉なるは之を義舉と云て如りながら今これと此義舉は弘安に在て義舉なり若し時宗をして明治年間に在らしめ魯英の使節を斬る歎又は明治の人人が時宗の義舉と慕みて其義に敬ふしとあり

なるに古は之を以て義と爲し今は之を以て狂と爲すは何ぞや時勢の沿革なり文明の前後なり都て時代と場所とを考への外に舍くときは何事にても便ならざるはなし何物にても不便利ならざるはなし變通の道とは正に此邊にある者なり

福澤氏が立論の趣意は右の如し是に由て之を觀れば氏は楠公を知らざる者に非ず之を知ること或は世の識者よりも詳ならん然り而して近日紛糾の論駁を生ずる所以は未だ互に其兩端を盡さずして論の極度を以て相接すればなり蓋し世の新聞投書家の如きは愛國の義氣固より盛なる者は雖も其外國交際の難きを視ること氏が如く切ならず國の獨立を謀ること氏が如く深からず時勢の沿革を察すること氏が如く詳ならず事物の輕重を量ること氏が如く明ならずして遂に枝末近淺の爭論に陥りたるものなり思ふに福澤氏は世論の喧しきを恐

れずして却て我日本國內の議論未だ高尚の域に進まずして其近浅なること此度の論駁の如きものあるを憂ふることならん

世人又福澤氏を駁するに共和政治又は耶蘇教云々の論を以てする者あり何ぞ夫れ惑へるの甚だしきや氏が耶蘇教に心醉して共和政治を主張するとは果して何の書に記して誰に傳聞したるや福澤氏は世界中に行はるゝ政治の專制を好まずして民權を主張する者なり其これを主張するや私に非ず公然と此説を唱へり我日本國にも古來專制の流弊ありて人民の氣力これが爲に退縮し外國の交際に堪ふ可らざるの恐あるが故に氏の素志は勉めて此弊を糺し民權を主張して國力の偏重を防ぎ約束を固くして政府の實威を張り全國の力を養て外國に抗し以て我獨立を保たんとするに在るのみ都て事物を論ずるには先づ其物の區別を立てざる可らず共和政治なり耶蘇教なり民權なり専

の恐あるが故に氏の素志は勉めて此弊を糺し民權を主張して國力の

厭重を防ぎ約束を固くして政府の實威と張り全國の力を養て外國に

制なり何れも同一の物に非ず氏は專制の暴政を嫌ふ者なり是亦氏に
限らず凡そ人類として之を好むものはなかる可し何ぞ獨り福澤の如
き奇人にして暴政を惡むと云ふの理あらんや又宗教と政治とは全く
別の物なり宗教の事に就ても積年氏の持論あり爰に贅せず此論も世
人の氏を見る所の心を以て聞かば必ず驚駭することあらん又この專
制と云ひ暴政と云ふものは必ず立君の政治に伴ひ民權と云ひ自由と
云ふものは必ず共和政治と並び行はるゝもの乎果して何の書を読み
誰の言を聞いて此臆斷を爲すや請ふ試に之を辯せん

專制は猶熱病の如く政治は猶人身の如し人身には男女老幼の別あれ
とも共に此熱病に罹る可し政治にも立君共和等の別あれども共に專
制の悪政を行ふ可し唯立君の專制は一人の意に出で共和の悪政は衆
人の手に成るの別あるのみなれども其專制の悪政を行ふの事實は異

なることなし猶人身に男女老幼の別あれども熱病に罹るの實は同一なるが如し何様の態度を以て事を斷するも熱病は必ず男子に限り專制は必ず立君の政治に限ると云ふの理なし

佛國ギゾー氏の文明史に云へることあり立君の政は人民の階級を墨守すること印度の如き國にも行はる可し或は之に反して人民群居漠然として上下の別を知らざる國にも行はる可し或は專制抑壓の世界にも行はる可し或は眞に開化自由の里にも行はる可し君王は恰も一種珍奇の頭の如く政治風俗は體の如じ同一の頭を以て異種の體に接す可し君王は恰も一種珍奇の果實の如く政治風俗は樹の如じ同一の果實よく異種の樹に登る可しと

右はあまり珍らしき説にも非ず少しく學問に志す者なれば是等の事は早く既に了解したる筈なるに今日に至るまでも尙耶蘇教共和政治

ありて片眼以て物を見るの弊ならん其掩はるゝ所の次第を尋ねに人見聞鑑は其政治なり共和政治は耶蘇教なり耶蘇教は洋學なりと己

す可し君王は恰も一種珍奇の果實の如く政治風俗は樹の如し同一の
果實よく異種の樹に登る可しと

なぞの如き陳腐なる洋説を以て區々の疑念を抱くは必竟掩はるゝ所
ありて片眼以て物を視るの弊ならん其掩はるゝ所の次第を尋るに人
民同權は共和政治なり共和政治は耶蘇教なり耶蘇教は洋學なりと己
の態度想像を以て事物を混同し福澤は洋學者なるゆゑ其民權の説は
必ず我嘗て想像する所の耶蘇共和ならんとて一心一向に之に怒るこ
とならん歟爰に鄙言を用ひて其惑を解かん云く酒店の主人必ずしも
酒客に非ず餅屋の亭主必ずしも下戸に非ず世人其門前を走て遽に其
内を評する勿れ其店を窺て其主人を怒る勿れ固より其怒心は其人の
私に非ず國を思ふの誠意なれども所謂國を思ふの心ありて國を思ふ
の理を辯せざる者と云ふ可し

明治七年十一月七日

慶應義塾 五九樓仙萬記

記者評曰議論精確而巧緻麻姑搔痒

日本の洋學は百二十餘年前醫學門より入り同時に物理學は學者社會の最も悅ぶ所にして藥材學に兼て化學、本草學、數學、天文學等を修る者も少なからず嘉永開國の後は以上諸科に續ぐに兵學を以てし明治維新の前後に至りて更らに面目を改め慶應三年夏余が米國より歸來のとき歴史、經濟、法律、數學等諸種の原書を輸入して私塾の教科書に用ひたるこそ洋學敎場の一大進歩にして日本國の少年子弟が始めて萬國の歴史を読み經濟の主義を講ずるが如き一として新奇ならざるはなし其書を教る者も學ぶ者も唯文を解するに巧拙こそあれ書中の事柄に至りては師弟共に等しく初學入門のことなれば一句一章読み去り読み來りて相共に拍手快と稱するもの多し誠に愉快なる次第なれども道徳論の一段に至りては余が米國在留中にも頗る心付かずして其書類の有無をも知らざれば固より之を携へ歸らず然るに當時吾々の

足らぬ心地して安んずるを得ず塾中長者の最も苦心する所なりしに

に至りては師弟共に等しく初學入門のことなれば一句一章読み去り
読み來りて相共に拍手快と稱するもの多し誠に愉快なる次第なれど

文明思想は次第に發達して恰も天下に恐るゝ者なしと聊か自から信じて竊に得々たりと雖も西洋の道德如何の議論を聞くときは何か物足らぬ心地して安んずるを得ず塾中長者の最も苦心する所なりしに明治元年の事と覺ゆ或日小幡篤次郎氏が散歩の途中書物屋の店頭に一冊の古本を得たりとて塾に持歸りて之を見れば米國出版ウェーランド編纂のモラルサイヤンスと題したる原書にして表題は道德論に相違なし同志打寄り先づ其目録に從て書中の此處彼處を二三枚づゝ熟讀するに如何にも德義一偏を論じたるものにして甚だ面白し斯る出版書が米國にあると云へば一日も捨置き難し早速購求せんとて横濱の洋書店丸屋に託して同本六十部ばかりを取寄せモラルサイヤンスの譯字に就ても様々討議し遂に之を修身論と譯して直に塾の教場に用ひたり是れより塾中には物理經濟等の外に新舶來の德論を論ずる

ことゝなりて自から面目を新にし既に事の端緒を開けばウエーランドの外に諸種の修身教科書を得ることも甚だ易くして明治四五年の頃に至り童子教とも云ふ可き物語りの原書を翻譯したるものは童蒙教草五冊なり古來外國人の事を禽獸のやうに云ひ囁し紅毛人の尻には尾があるなと思ひし輩の迷を解く爲めには隨分有力なる翻譯書なりしと思ふ

かたわ娘

かたわ娘は實にたわいもなき小説やうのものなれども之を綴りたるには自から其時の事情あり明治四五年の頃人の噂を傳聞するに京都の堂上公卿の中には今尙ほ鐵漿を着ける者ありと云ふ余は竊に不平に堪へず王政維新既に四五年を経過して堂上貴顯の因循文弱、唯驚くの外なし數百年來京都の公卿輩が國中に重きを爲し得ざりしも偶然に非ず實に氣の毒なる次第なれば今これを文明に導て活潑男兒たら

せしむることを至急なれど思ひ執筆起草して之を識論せんとする折柄、不圖思案すれば待てしばし、公卿が婦人の眞似するは固より可笑しけ

の堂上公卿の中には今尙ほ鐵漿を着ける者ありと云ふ余は竊に不平
に堪へず玉政維新既に四五五年を経過して堂上貴顯の因循文弱唯驚く

しめんとするには先づ其外形よりして兎も角も婦人やうの鐵漿を廢
せしむること至急なれと思ひ執筆起草して之を議論せんとする折柄、
不圖思案すれば待てしばし、公卿が婦人の眞似するは固より可笑しけ
れども其婦人が天然に白き齒を持ちながら態と之を黒く染るも亦笑
ふに堪へたり左れば小數の公卿は答るに足らず全國大多數の婦人の
齒を白くして天然の美を保たしむるは事の順序なり婦人にして果し
て鐵漿の陋習を脱するときは京都の柔弱男兒の自から愧ぢて自から
改むるや必せり一舉兩善の法なりと是に於てか最前の文案を改め單
に婦人に向て鐵漿の利害を説かんとし齒を黒くするは人爲の片輪者
なりとの意味を以て之を諷したることなり

明治五年十一月九日改曆の發令あり其時の公文左の如し

今般改曆之儀別紙の通被仰出候條此旨相達候事

(別紙詔書)

朕惟ふに我邦通行の暦たる太陰の朔望を以て月を立て太陽の躔度に合す故に二三年間必ず閏月を置かざるを得ず置閏の前後時に季候の早晚あり終に推歩の差を生ずるに至る殊に中下段に掲ぐる所の如きは率ね妄誕無稽に屬し人知の開達を妨ぐるもの少しあらず蓋し太陽暦は太陽の躔度に従て月を立つ日子多少の異ありと雖も季候早晚の變なく四歳毎に一日の閏を置き七千年の後僅に一日の差を生ずるに過ぎず之を太陰暦に比すれば最も精密にして其便不便も固より論を俟たざるなり依て自今舊暦を廢し太陽暦を用ひ天下永世之を遵行せしめん百官有司其れ斯旨を體せよ

明治五年壬申十一月九日

一今般太陰暦を廢し太陽暦御頒行相成候に付來る十二月三日を以

下永世之を遵行せしめん百官有司其れ斯旨を體せよ
明治五年壬申十一月九日

て明治六年一月一日と被定候事

但新暦鏤板出來次第頒布候事

一一箇年三百六十五日十二月に分ち四年毎に一日の閏を置候事
一時刻の儀是迄晝夜長短に隨ひ十二時に相分ち候處今後改て時辰
儀時刻晝夜平分二十四時に定め子刻より午刻迄を十二時に分ち
午前幾時と稱し午刻より子刻迄を十二時に分ち午後幾時と稱候
事

一時鐘の儀来る一月一日より右時刻に可改事

但是迄時辰儀時刻を何字と唱來候處以後何時と可稱事

一諸祭典等舊暦月日新暦月日に相當し施行可致事

太陽暦 一年三百六十五日 閏年三百六十六日

(四年毎に置之)

一月大 三十一日 其一日 即舊曆壬申 十二月三日

二月小 二十八日 (閏年二十九日) 其一日 同癸酉正月四日

(三月以下略す)

(別に時刻表あり二時は丑の刻とか四時は寅の刻とか記したるもの
なり)

以上の公文を見れば古來の大陰曆を廢し太陽曆に改むることにして
甚だ妙なり吾々の本願は唯舊を棄て、新に就かんとするの一事のみ
なれば何は擱置き先づ大養成を表したりと雖も抑も一國の曆日を變
するが如きは無上の大事件にして之を斷行するには國民一般に其理
由を知らしめて丁寧反覆新舊兩曆の相異なる由縁を説き双方得失の
在る所を示して心の底より合點せしむこそ大切なれ歐羅巴の耶蘇教
陽曆國にて露國の曆は他に異なること僅かに十二日なれども古來の

時に變化して凡そ一箇月の劇變を斷行しながら政府の布告文を見れ
ば簡單至極にして其詳なるを知るに由なし畢竟官邊に其注意なくし

由を知らしめて丁寧に反覆新舊兩暦の相異なる由縁と説き双方得失の在る所を示して心の底より皆聴せしりこそ大體なれど其の事は

慣行にて今日尙ほ之を改むるを得ず然るに日本に於ては陰陽暦を一時に變化して凡そ一箇月の劇變を斷行しながら政府の布告文を見れば簡單至極にして其詳なるを知るに由なし畢竟官邊に其注意なくして且つは筆執る人の乏しきが爲めなりと推察せざるを得ず左れば民間の私に之を説明して餘處ながら新政府の盛事を助けんものと思付き忽々書綴りたるは改曆辨なり其起草は發令の月か翌十二月か日は忘れたり少々風邪に犯され床の上にて筆を執り朝より午後に至るまで凡そ六時間にて脱稿したり固より木葉同様の小冊子にて何の苦勞もなかりしが扱これを木版にして發賣を試みたるに何千何萬の際限あることなし三版も五版も同時に彫刻して製本を書林に渡しさへすれば直に賣れ行く其有様は之を見ても面白し一冊何錢とて高の知れたる定價なれども塵も積れば山と爲るの謹に洩れず發賣後二三箇

月にして何かの序に改曆辨より生じたる純益の金高を調べたるに七百圓餘に上りたることあり其時著者は獨り心に笑ひ此書を綴りたるは僅に六時間の勞なり六時間の報酬に七百圓とは實に驚き入る、學者の身に斯る利益を收領しても宜しかる可きやと恰も半信半疑に自から感じたるは舊藩士族根性の然らしむる所にして今尙ほ之を記憶す、二三箇月の後も賣捌は依然として止まず利益の全額は千圓も千五百圓も得たることならん畢竟余が今日に至るまで何に一つの商賣もせず、工業もせず、家富みて餘あるには非ざれども大勢の家族と共に心配なく生活して靜に老餘を樂しむは改曆辨のみならず他の著譯書より得たる利益の多かりしが故なり

又改曆辨の卷末に時計の圖を記して其見やうを示したり、つまらぬ事ながら其次第を語らんに徳川の末年に世上一般漸く西洋風を催ほし

も三百兩もしたることならんに其時計を見る法を解する者甚だ少な
ノ貴頭圍座談話な等の折節、座中の一人が「もう何時で御座らう貴殿の」

なく生活して静に老餘を樂しむは改曆辨のみならず他の著譯書より

時の政府に在る貴顯の人々は何れも金の時計を懷中して價は二百兩
も三百兩もしたることならんに其時計を見る法を解する者甚だ少な
し貴顯團座談話などの中折節、座中の一人が「もう何時で御座らう貴殿の
時計は如何で御座る」と云へば隣席の人が懷中より光り輝く時計を取
出し之を見て「最早や一時過ぎで御座る」と答ふるに此方も同じく自分
の時計を見て成るほど左様で御座るか「貴殿の長針は何時の處に居ま
す」との間に「長針は大抵三時で御座る」と答ふるは正に是れ一時過ぎ十
五分前後のことなり凡そ是等の問答にして其實は時計の實用を知ら
ず吾々貧書生は自分に時計こそ所持せざれども次ぎの間から其話を
聞いて籍に捧腹に堪へず旗本の殿様が大祿を取て大きな金時計を持て
其時計の見やうが分らぬか寶の持腐りとは是れならん」など、冷評し
たるは毎度のことなりしが維新の後も世間には必ず同様の人物多か

帳合之法

らんと思ひ、くだくしくも時計の圖解を示したることなり亦以て當時の世態を想ひ見るに足る可し

余が著譯書中最も画到にして最も筆も勞したるものは帳合之法なり
舊幕府時代に一寸その原書を見たることあれども餘り心に留めず書
中の二三枚を讀で何か是れは金錢の請取書を認むる法式にてもある
かと思ひしのみにて其まゝに捨置きしが明治維新後に至りて横濱の一友人が新舶來の原書を携へ來り本書はブック、キーピングとて金錢の受授取引、會計の法を記したるものにして商家の必用缺く可らざるものなりと云ふ依て之を手に取り尙ほ二三日留置きて熟覽すれば如何にも商賣用の書にして其帳面の仕組甚だ密なるが如し余が生來の境遇、日本流の大福帳さへ一見したることはなけれども今この原書を翻譯すれば大福帳の法に優ること萬々なりと深く自から信じ直に翻譯

に着手して其原文を讀むは左まで困難ならざれども之を譯して商人の實用に供せんとするには先づ日本商家の實際に取引する模様を知

のなりと云ふ依て之を手に取り尙ほ二三日留置きて熟覽すれば如何
にも商賣用の書にして其帳面の仕組甚だ密なるが如し余が生來の境

に着手して其原文を讀むは左まで困難ならざれども之を譯して商人
の實用に供せんとするには先づ日本商家の實際に取引する模様を知
り商家通用の言葉を知ること肝要なり都て士族書生には不案内の事
のみにして當惑したること多し次に大困難は金高を記すに何百何十
何圓何十何錢と日本流に書けば文字長く隨て帳面も多くなりて逆も
實用に適せず然らば三二五、七八と記して三百二十五圓七八錢と讀
ませんかと思へども古來絶えて例なきことなれば逆も通用六かしか
らん夫れよりも西洋の數字は僅に九字なれば之を日本人に覺ゆさせ
ることとして豎の譯書に數字ばかりを横にして西洋の原字を用ひん
斯くすれば何萬何千何百何十の順序は左より右へ計へて日本の双露
盤の桁と恰も同様なるゆゑ人の呑込みは易からん左りとて日本人に
新に九字の西洋文字を用ひしむるは中々の困難なり如何して善から

んと思案に悩み幾回か系紙の版を彫刻して其體裁を試みたれども何分にも自から釋然として安んずるを得ず一進一退不決斷の折柄、先年余が米國在留中特に懇意にしたるチャース ウォールコット ブルックスと云ふ商人が維新後日本大使の爲め種々周旋したるその由縁を以て我國に渡來し府下木挽町の精養軒に止宿したことあり依て余は此人を尋問して話の序に右數字の翻譯法を相談せしにブルックスも色々考へたりしが如何にしても新に西洋の數字を用ふるは穩かならず假令ひ古來の例なきにもせよ日本の數字を用ふるに若かずとの説にて乃ち其説に従ひ思ひ切て日本字を竪に書き百二十三圓四十五錢を一二三、四五と記するが如き體裁に決定したり今日となりて見れば簿記學の翻譯も多く其法を事實に用ふる者も甚だ多くして數字を記すは商家の小僧も心得居ることなれども其初めに於ては之を譯すること最

ち其説に従ひ思ひ切て日本字を堅に書き百ニ十三圓四十五錢を一二
の翻譯も多々其出と事實に用ゐる者も書が多々して數々トシ

も易からず左れば二十何年以來殆んど普通なる日本數字の用法も本
を尋ねれば當時偶然渡來したる米國人ブルックス氏の賜なりと知る可
し

會議辨

人事の進歩は實に驚く可きものにして我國演說法の如きは即ち其一
例なり今日の實際を見れば人が其心に思ふ所を口に述べて公衆に告
るは尋常普通の事のみならず速記法さへ行はれて實用を達する程の
世の中に演説なぞは百千年來の慣習ならんと思ふ人もある可きなれ
ども其演説は廿何年前の奇法にして當時これを實行せんとして様々
に工風したる吾々の苦勞は自から容易ならず今その次第を語らんに
て明治六年春夏の頃と覺ゆ社友小泉信吉氏が英版原書の小冊子を携へ
拙宅に來り扱云ふやう西洋諸國にて一切の人事にスピーチの必要な
るは今更ら言ふに及ばず彼國に斯くまで必要な事が日本に不必要

なる道理はある可らず否な我國にも必要のみか此法なきが爲めに政治も學事も將た商工事業も人が人に所思を通ずるの手段に乏しく之が爲めに双方誤解の不利は決して少なからず今この冊子はスピーチの大槻を記したるものなり此新法を日本國中に知らせては如何との話に余は其書を開き見るに成程日本には新奇なる書なり然らば兎に角に其大意を翻譯せんとて數日中に抄譯成りしものは即ち會議辨なり扱その翻譯に當り第一番に原語のスピーチに當る可き譯字を得ず、此とき不圖思付きたるは余が舊藩中津にて藩士が藩廳に對して願届は尋常一樣のことなれども時としては銘々の一身上に付き又は公務上の情實に關し公然たる願に非ず又届にも非ずして書面を呈出することあるの例にして此書面を演舌書と云ふ他藩にも其例あるや否や知らざれども兎に角に演舌の文字は中津にて慥に記憶するが故に夫

れより社友と諺り舌の字は餘り俗なり同音の訛の字に改りんとて演説の二字を得てスピーチの原語を譯したり今日は帝國議會を始めと竟也大なる事にして知らざ

此とさう不圖思付きたるは余が舊藩中津にて藩士が藩廳に對して廳届は尋常一樣のことなれども時としては鎧々の一身上に付き又は公務上の情實に關し公然たる願に非ず又居にも非ずして書面を呈出する

れより社友と謀り舌の字は餘り俗なり同音の説の字に改めんとて演説の二字を得てスピーチの原語を譯したり今日は帝國議會を始めとして日本國中の寒村僻地に至る迄も演説は大切な事にして知らざる者なきの有様なれども其演説の文字は豊前中津奥平藩の故事に倣ふて慶應義塾の譯字に用ひたるを起源として全國に蔓延したるものなり其他デベートは討論と譯し可決否決等の文字は甚だ容易なりしが原書中にセカンドの字を見て之を贊成と譯することを知らずして頗る窮したるは今に記憶する所なり夫れ是れ文字も畧定りて譯書は印刷に附し社友相共に此新事業を研究して竊に實地に試み或は拙宅の二階に集り又は社友の私宅に會席を設くる等熱心怠ることなく明治六年より翌七年の半に至ては聊か熟練したるが如し明治七年六月七日肥田昭作氏の宅にて余が演説したるは口に辯ずる通りに豫め書

に綴り假りに活字印刷に附して之を其まゝ述べんことを試みたるも
のにして今日幸に其活版の遺るものあれば之を左に記す

明治七年六月七日集會の演説 福澤 諭吉

この集會も昨年から思立たことでござりますが、とかく其規律もたゞ
すあまり益もないやうで、このあひだまでも其當日には人は集ると申
すばかりのことでござりましたが、このたびはまたすこし趣を替へて、
社中の宅へ順々に席を設ける約束にしまして、則ち今日はこの肥田君
の御宅に集たことでござります

せんたい、この集會は初めから西洋風の演説を稽古して見たいと云ふ
趣意であつた、ところが何分日本の言葉は、獨りで事を述べるに不都合
で演説の體裁が出来ず、これまでも當惑したことでござりましたけ
れどもよく考へて見れば、日本の言葉とても演述のできぬと申すはな

申してすておけば際限もないことで、何事も出来る日はありますまい、

いわけ畢竟昔から人のなれぬからのことでござりませう、なれぬと申してすておけば際限もないことで、何事も出來る日はありますまい、いつたい學問の趣意はほんを讀むばかりではなく、第一がはなし、次にはものごとを見たりきいたり、次には道理を考へ其次に書を讀むと云ふくらゐのことでござりますから、いま日本で人の集たどきに、自分の思ふことを明らかに大勢の人に向て述ることができると申しては、初めから學問のてだてを一つなくして居る姿で、人の耳目鼻口五官の内を一つ欠たやうなものではござりませぬか、御同前に五官揃ふても人なみにないと平生患ひて居る處に、有る其一つのものをつかはずにむだにして置くとは、あまりかんがへのないわけではござりませぬか先づ爰に物事があるとして、其ものがいよく大切だと云ふことを知るには、其ものが有て便利、なくて不便利と云ふ其便利と不便利の箇條

をかぞへ上ぐればよくわかります、いま演説の法があるとないと付て其便利と不便利をかぞへて見ませう

第一 原書を讀でも翻譯の出來ぬ人があり、またできてもひまのないものもござります、假令ひ其ひまがあるにもせよ、生涯の内に何ほどの翻譯ができませう、そこに今演説の道が開けましたら、學問の弘まることはこれまでより十倍もはやくなりませう

第二 世の中に原書が讀めて翻譯のできぬと云ふ人は、唯むづかしい漢文のやうな譯文かできぬと云ふまでのことで、原文の意味はよく分つて居ることだから、其意味を口で云ふ通りに書くことは誰れにもできませう、して見ればこの後は世の中の原書よみは其まゝ翻譯者になられる、そこで世間に翻譯書はふえて、其書は読み易く、何ほどの便利かされません、翻譯書のをかしいと云ふのは、漢文のやうな文章の中にはなしのことばがまじるからこそをかしけれ、これをまるではなしのが

つて居ることだから、其意味を口で云ふ通りに書くことは譲れにもで
きません、して見ればこの後は世の中の厭厭より其のまゝ記載する所

なしのことばがまじるからこそをかしけれ、これをまるではなしの文
にすればすこしもをかしいわけはありますまい、都て世の中のことは
何でも、なれどせうでもなります、御同前に勇氣を振て人のさきがけを
しやうではないか、すこしなまいきなやうだけれども、世間にこわいも
のはないと思ふて、我輩から手本を見せるがようござります

第三　いま日本の誰に逢ふても寒暑のあいさつでも、はじめからしま
いまであきらかにまんざくに述べてしまふ人はござりません、ことに
朋友の送別、祝儀、不祝儀、何事によらず大勢の人に向て改まつて口上を
述べることは絶てできず、唯酒でも飲で騒わがしくすれば、それで御祝
儀など、云ふのも、あまり不都合なわけではござりませぬか

第四　演説は我輩のやうな學者ばかりのする事ではござりません、婦
人にも小供にも其心得がなくてはかないません、其證據には一寸よそ

の家うちに行ゆて、其内うちの下女ぢよに口上こうじょうを取とり次つがせてごらんるんなさい、いついつでもまちがはぬことなし、畢竟ひつきやうこの下女ぢよなどは口上こうじょうを聞きたこともなく、のべたこともないからでござりませう

第五 演說えんせつの法ほうがないものだから、世間せけんには意見書いげんしょとか何なにとか云いふものを書いてやりとりすることがござりますが、これは啞子をしが筆談ひつだんをするやうなもので、其書かしたものを見て其心こころもちをくみとり口くちと耳みみとの縁えんはなくて、筆と目との取とり次つで、應對おうたいをする趣向じゅくこうでござります、それゆゑ議院ぎいんなどの席せきで一度いちど書かたものを出だしてこれを讀よ上げた跡あとでは、もはや議論ぎろんは出來できず、議論ぎろんがあれば内うちへかへつて筆筆をとらねばならぬことでござりませう、こんなことではとても民選議院みんせんぎいんも官選議院くわんせんぎいんも出來できますまい、また學問がくもんのなかまなかまも追々おいかくふえて盛さかんに集會しふくわいを開ひらくこともありませう、其時には筆談ひつだんの集會しふくわいでなくて、口上こうじょうの集會しふくわいにして、其口上こうじょうを紙かみに寫うつして

本ほんにするやうにしたいものでござります
本ほんにしても便利べんり不便利ふべんりのケ條は澤山たくさんあるけれども、今日は先づこれを略りやく

なぞの席で一度書たものを出だしてこれを讀上げた跡では、もはや議論は出來ず、議論があれば内へかへつて筆をとらねばならぬことで、さりとて筆と目との取次で、應對をする趣向でござります。それゆゑ本議院

本にするやうにしたいものでござります
此外にも便利不便利のケ條は澤山あるけれども、今日は先づこれを略して、いよ／＼演説が大切なと云ふがわかれれば、此上は銘々の見込をのべたり、又は原書をしらべたりして、規則を定めませう（演説終）

右の如く内々の準備は次第に整ひ社友も次第に事に慣るゝに付き此新法を日本國中に弘めんとは吾々本來の冀望にして去年以來塾外の親友には事の次第を語り兎も角もして其同意を求めるどすれども何分にも新奇のことにして應する者少なし其時明六社とて筈作秋萍、津田真道、西周助、加藤弘之、杉亨二、森有禮等の諸氏と折々會合することありしかゞも演説の一ことに付ては何れも半信半疑にて之を共にせんと云ふ者なし就中森有禮氏の如きは年は少しかけれども異論を唱へ西洋流のスピーチは西洋語に非ざれば叶はず日本語は唯談話應對に適す

るのみ公衆に向て思ふ所を述ぶ可き性質の語に非ず云々などを反対するゆゑ余は之を反駁し一國の國民が其國の言葉を以て自由自在に談話しながら公衆に向て語ることが出来ぬとは些少の理由なきのみならず現に我國にも古來今に至るまで立派にスピーチの慣行あり君は生來寺の坊主の説法を聽聞したることなきや説法を聞かずとならば寄席の軍談講釋にても滑稽落語にても苦しからず都て是れ一人の人が大勢の人を相手にして我が思ふ所を述るの法なれば取りも直さずスピーチなり講釋師語落家はスピーチが出來て吾々學者には出來ぬと云ふか譯けの分らぬ説なり云々と反覆議論すれども中々屈服の色なし其後或日本挽町の精養軒に明六社員十名ばかりの集會を催ほして同日も亦スピーチの話と爲りしかゞも相替らず賛成者に乏し依て余は一策を按じて何氣なき風に發言し今日は諸君に少しお話し申す

が大勢の人に相手にして我が思ふ所を述るの法なれば取りも直さず
スピーチなり講師落家はスピーチが出来て吾々學者には出來ぬ
と云ふ然らば諸君は此テーブルの兩側に并んで吳れ給へ僕は爰で
しゃべるからとテーブルの一端に立ち頃は丁度臺灣征討の時にて何
か其事に付き議論らしきことをべらべら饒舌り續に卅分か一時間ば
かり退屈させぬやうに辯じ終りて椅子に就き扱今僕の説は諸君に
聞き取りが出来たか如何にと問へば皆々能く分つたと云ふにぞソリ
ヤ見たことか日本語で演説が叶はぬとは無稽の妄信に非ざれば臆病
者の遁辭なり今僕の辯じたるは日本語にして僕一人の辯じたる所の
言葉が諸君の耳に入て意味が分れば即演説に非ずして何ぞや以後演
説の誹難無用なりとて此日は先づ演説首唱者の勝利に歸して相分れ
たり夫れより塾に歸りいよ／＼此新法を弘めんとするには特に演説
の會堂を作ること必要なりと決して直に新築に着手したり此時余が

手元には著譯書を發賣して聊か貯蓄もあり新築の圖案は偶まで在米國富田鐵之助氏より寄贈せられたる諸種會堂の圖本を本にして之を取捨し凡そ二千何百圓を費して勿々竣工したるものは慶應義塾の演說館にして創立以來今日に至るまで學術演說の斷絶したことなし斯くて吾々の苦心したる演說の獎勵は効を奏すること最も速にして間もなく世間一般の流行を成し義塾の演說館に次で凡そ二箇年後に文部省にても神田橋外に講義室なるものを新築して演說等の用に供したり左れば慶應義塾の演說館は其規模こそ小なれ日本開闢以來最第一着の建築國民の記憶に存す可きものにして幸に無事に保存することを得ば後五百年一種の古跡として見物する人もある可し

従前の著譯は専ら西洋新事物の輸入と共に我國舊弊習の排斥を目的にして云はゞ文明一節づゝの切賣に異ならず加之明治七八年の頃に

至りては世態漸く定まりて人の思案も漸く熟する時なれば此時に當り西洋文明の概略を記して世人に示し就中儒教流の故老に訴へて其賛成を得ることもあらんには最妙なりと思ひ之を敵にせずして今は却て之を味方にせんとの腹案を以て著したるは文明論の概略六巻なり讀者は何れ五十歳以上視力も漸く衰へ且つ其少年時代より粗大なる版本に慣れたる眼なればとて文明論の版本は特に文字を大にして古本の太平記同様の體裁に印刷せしめたり本書の發行も頗る廣くして何萬部の大數に達したりしが果して著者の思ふ通りに故老學者の熟讀通覽を得たるや否や知る可らざれども發行後意外の老先生より手書到來して好評を得たること多し有名なる故西郷翁なども通讀したことと見ゆ少年子弟に此著書は讀むが宜しと語りしことありと云ふ

明治六年頃帳合之法を發行して書物は賣れたれども扱この帳合法を商家の實地に用ひて店の帳面を改革したる者は甚だ少し聊か落膽せざるを得ず其實用に適せざるは尙ほ忍ぶべしとするも遇々當時新進の商人又は會社などにて西洋風を氣取り萬般の施設を新奇にして帳簿は無論彼國の流儀に限るなどして新法を採用したる者の中には商運非にして往々失敗したる連中も少なからず其原因ば必ずしも帳合法の罪に非ざる可けれども著者の身に於ては蔭ながら赤面せざるを得ず依て竊に按するに商工社會の人が其營業を西洋風にせんとならば先づ西洋の經濟主義を知ること肝要なり其根本大體の主義を知らすして單に帳簿の風を改革するが如き事の順序に非ず左れば今日西洋經濟の大概を廣く民間の子弟に教へて其成長を待つこそ無難の策にして帳合法も始めて實際の用を爲す可しと思ひ恰も學校讀本の

と見ゆ發賣頗る盛なりしが爰に序ながら記すべき事こそあれ明治體裁に綴りたるもののは民間經濟錄なり此書も時の需要に遡したるも

體裁に綴りたるものは民間經濟錄なり此書も時の需要に適したること
と見發賣頗る盛なりしが爰に序ながら記すべき事こそあれ明治
十四五年の頃なり政府が教育に儒教主義とて不思議なることを唱へ
出し文部省にては學校讀本の検定と稱して世上一般の著譯書等を集め
め省の役人が集會して其書の可否を議定し又は時候後れの老儒者を
呼び集めて讀本の編纂を囑託するなど恰も文明世界に古流回復の狂
言を演ずる其最中に福澤の著譯書は學校の讀本として有害無益なり
と認められ唯の一部も検定に及第せざりしこそ可笑しけれ即ち此民間
經濟錄も落第中の一にして此方は固より文部省に採用を依頼する
等の卑劣手段は思ひも寄らず遠方より省中の事情を傳聞しながら唯
竊かに冷笑する中に經濟錄は既に已に五萬部も八萬部も世上に流布
したるのみならず爾後十餘年を経て明治二十五年に至り最早や前年

の版木もなく製本のなき折柄、府下の豪商故堀越角次郎氏が自家商法の實際に徴し少年輩に此書を讀ますれば自から利益あるを信じて再版の事を企て私費を投じて二千五百部を活字に印刷せしめ之を知己朋友の間に分ち又堀越家の郷里なる群馬縣吉井近傍の學校等に寄附したることあり前年文部省に於て政府の意を迎へ彼の讀本検定に力を入れたる俗輩も是等の事情を見聞して定めて失望せしことならん是れは單に些末事にして論ずるにも足らざることなれども兎に角に明治十四五年の政變に政府が何か狼狽して古風復活の眞似したるが爲めに國中の少年子弟は恰も之に欺かれ眞面目に文明主義を排斥して漢學に入門したる者多く其時の子弟が昨今成生して大人となり種々様々の言論を放て世教を害するのみならず文明政府の運動を妨げて當局者を困却せしむるこそ氣の毒なる次第なれ是れぞ所謂身から

分權論以下

出たる錆なるべし

分權論、民權論、國權論、時事小言の如きは官民調和の必要を根本にして間接直接に綴りたるものなり明治政府の發論は攘夷論にして大事成るに及んで開國主義に變化し俗に云ふ惡に強きは善にも強しの諺に洩れず昨日までの殺人暴客は今日の文明士人となり政雲に飛翔して活潑磊落言ふとして實行せざるはなく實行して効を奏せざるはなし傍観の吾々に於ても拍手快と稱す、況して當局の本人に於ては愉快極まり得意極まるこじならんなれども文明開化は政府の專有に非ず國民も又共に進歩して其知識の程度、時としては政府の右に出るものなきに非ず且つ政府は治安維持の大任を負擔するが爲めに自から活動不如意の歎あるに反して人民の責任は政府に比して左まで重からず船に評すれば國家全體の治安に關して直接に無責任とも云ふ可き境

遇に居り其責任の輕き割合に言論は却て公平正直にして假令ひ個人一時の放言にても人の耳に入り易く自から政府に對して反對の意を生する其一方に政府の役人等は王政維新の功勞を頼みにして世間の議論を侮り萬一の時には力を以て壓倒するも易しなど々兎角人民を疎外して之を容るゝの色なし即ち民權官權の相分るゝ所以にして双方共に一得一失何れを是とし何れを非とする可きに非ざれども左りとて此まゝに捨置くときは國家の不利これより大なるはなしと獨り心に感じたるは凡そ明治十年以來のことにして之を醫するの法は唯官民を調和せしむるの外に手段なきを信じて或は地方分權の要を説き或は民權の眞面目を論じ又或は國權の大切なるを諭して官民の目的を外に向はしめんとし是等の爲めには國會の開設も妙ならんなど論じたる其全面の要領を概すれば政府は容易に破壊すべからず人民は

容易に侮る可らずとの意を直接間接に示したることなれども政府の

容易に侮る可らずとの意を直接間接に示したことなれども政府の人は兎角目前の急に迫られて遠き利害を謀るの遑なく又その役人の中には不似合に無學無識なる人物も多く文明進歩の大勢を知らずして要もなき事に壓制を試みんとすれば人民は恰も西洋民權論の耳學門を卒業して只管これに反對し官民調和は擱置き双方の間いよ／＼離隔したるこそ氣の毒なれ夫れより明治十五年に至り社友輩年輩が新聞紙發行の事を企て余も之に關係して毎度筆を執り政論に關しては其要常に調和を主張するのみ抑も余が此調和論の一念は明治十五年始めて發起したるに非ず又十年にも非ず現に明治七八年の頃かと覺ゆ故大久保内務卿と今の伊藤博文氏と余と三人何れかに會合したるとき談話政治の事に及び其時余の説に政府は固く政權を執り時としては壓制の譏も恐るゝに足らずと度胸を極めながら一方に民間の

物論は決して侮るべからず云々と話したることあり又其以前明治の初年麻布鳥井坂か長坂邊に住居の鮫島尙信氏より招待に預り推參したれば大久保内務卿と相客にて主客三人食後の話しに大久保氏の云ふに天下流行の民權論も宜し、左れども人民が政府に向て權利を爭へば又之に伴ふ義務もなかる可らず云々と述べしは暗に余を目して民權論者の首魁と認めたるものゝ如し依て余は之に答へ權利義務の高説よく了解せり抑も自分が民權云々を論ずるは政府の政權を妨ぐるに非ず元來國民の權利には政權と人權と二様の別あり自分は生れ付き政事に不案内なれば政府は政府にて宜しきやう處理せらる可し唯人權の一段に至りては決して假す可らず政府の官吏輩が馬鹿に威張りて平民を輕蔑し封建時代の武家が百姓町人を視るが如くにして人生至重の名譽を害するのみならず其實利益をも犯さんとするが如き

萬々之水出んずるを得ず左れば自刃の争ふ所は唯人權の一方のみなれども今後歲月を経るに従ひ世に政權論も持上りて遂には蜂の巣を

萬々々之に甘んずるを得ず左れば自分の争ふ所は唯人權の一方のみなれども今後歲月を経るに従ひ世に政權論も持上りて遂には蜂の巣を突き毀したるが如き有様になるやも計られず其時こそ御覽あれ福澤は決して其蜂の仲間に這入て飛揚と共にせざるのみか今日君が民權家と鑑定を附けられたる福澤が却て着實なる人物となりて君等の爲めに却て頼母しく思はるゝ場合もある可し幾重にも安心あれと恰も約束したることあり是は一場の茶話にして今更ら其話を思ひ出して心事を左右するに非ざれども政府の虛威を廢して官吏の體度を改むると共に國務の爲政權を當局者に一任して自由自在に運動せしめ人民も亦深く文明の教育に志して政治思想を養ひ政府と相對して譲る所なく共に國事を分擔して國運萬歳ならんことを祈るのみ

右全集緒言終りて簡ほ念の爲めに一言あり著譯書中の二三、其舊版に

他人の姓名せいめいを記し又は諭吉立案じょうき、何某筆記ひづきなど卷首くわんしゅに掲げたるは當時じどい様々ようようの事情じょうやうに任せて他名を用ひたることなれども今回こんくわいは改めて實名じつめい諭吉の文字を現はしたり讀者どくしゃ之を諒せよ

福澤全集緒言終

明治三十年十二月一日印刷
明治三十年十二月五日發行

定價金貳拾錢

京橋區南鍋町二丁目十二番地

編輯者兼時事新報

右代表者

芝區三田四國町二番地十七號

吉田東洋

麹町區內幸町一丁目五番地

印刷者 中西美重藏

京橋區南鍋町二丁目十二番地

時事新報

社

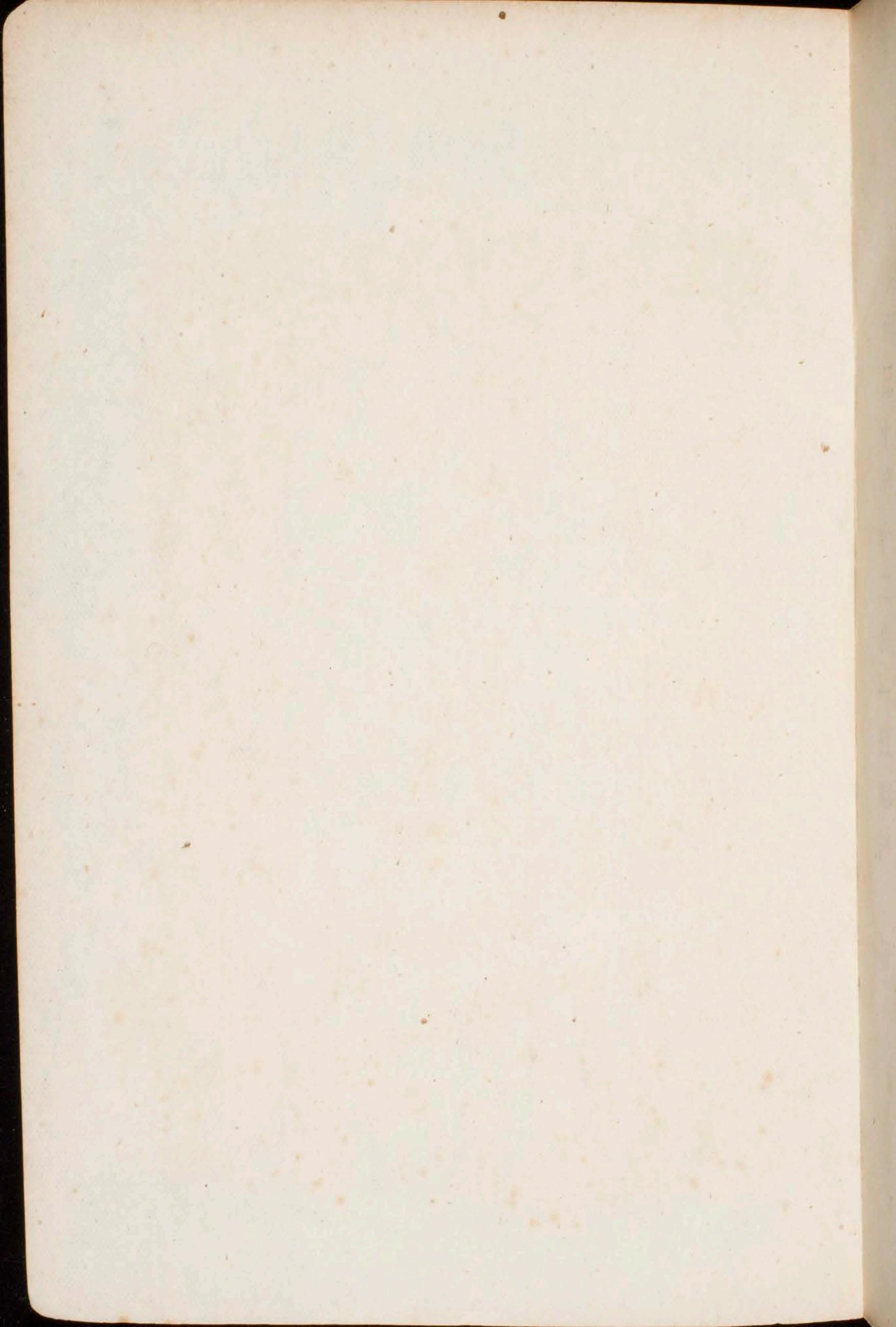
發行所

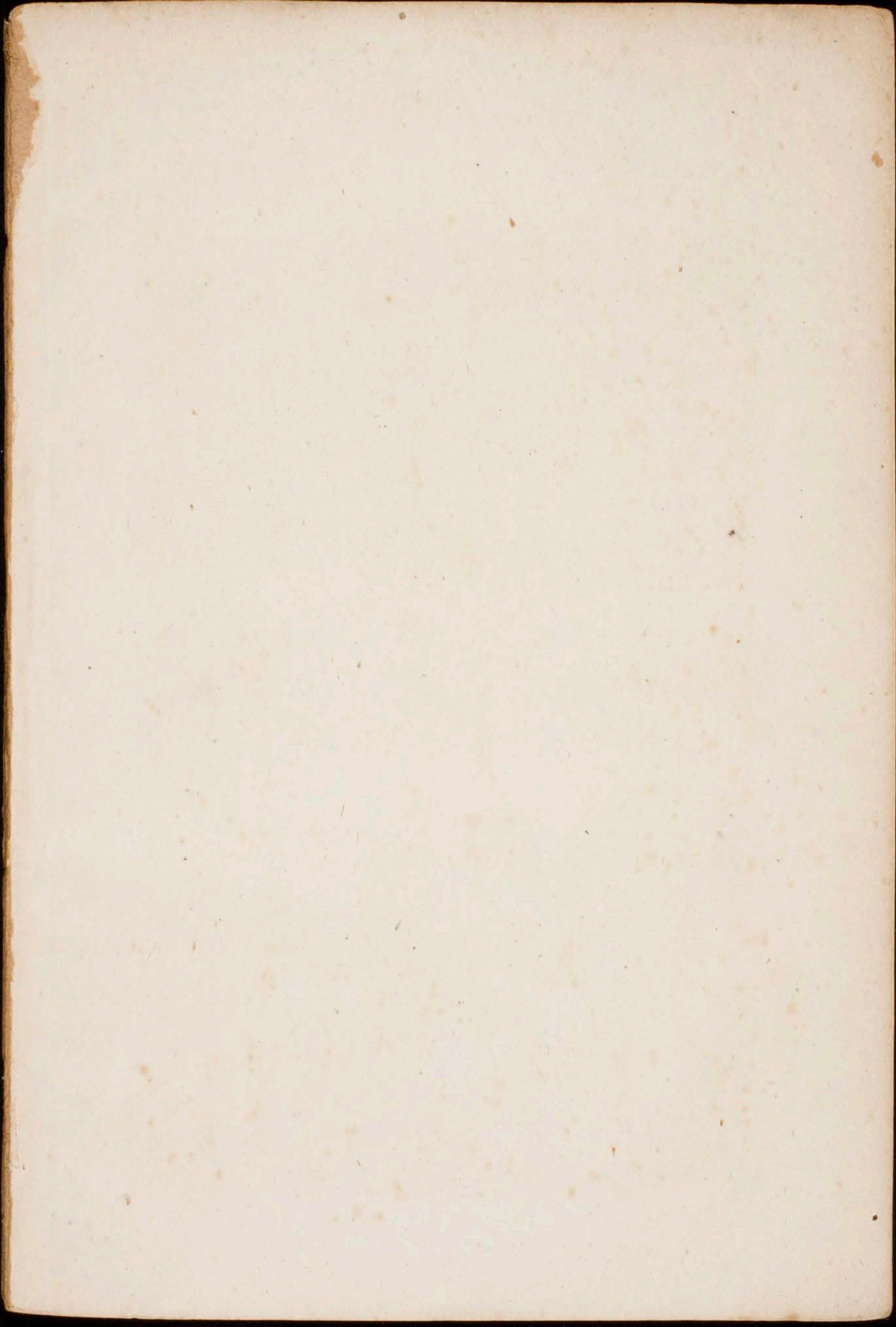
麹町區內幸町一丁目五番地

ジヤパン、タイムス社

印刷所







三田

清水書店

100-

福井公集
26/18.7

保存用

